
魔法の存在しない世界【改訂版】

MP5

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法の存在しない世界【改訂版】

【Nコード】

N2831V

【作者名】

MP5

【あらすじ】

西暦一八〇〇年、七月。二人の男女の間に、一人の子供が産まれた。

翌年、その子供が不思議な力——『魔法』を使うようになった。そしてその年から、人類は飛躍的な進歩を遂げることとなる。

更に一〇〇年後。

不思議な子供を軸に、人類の六割が『魔法』という力を使える様になった。この早さは異常であった。

更に五〇年後。人類は魔法という力に慣れきっていた。

だが、全ての人間が魔法を使えるようになった訳ではない。三割弱の人間は魔法など使えず、それらの人々は世界から徐々に孤立していった。

そして二〇〇〇年。魔法の使える人間の一部が魔法の使えない人間を殺す『旧人類狩り』が起こった。

それにより世界の人間は全て魔法の使える『新人類』だけになった。

——その筈だった。

治療試験

「今から数年前、数人の『新人類』が『旧人類』を完全に滅ぼしました。この事を『旧人類狩り』と言います」

授業中にも関わらず寝ていた『白坂サトル』はその言葉に反応し、顔を上げた。今は二時限目の、歴史の時間。白坂は眼を擦り教師の方を見る。教師は学校の図書室から持ってきただろう本を片手に、その旧人類狩りの事について説明していた。

現在、殆どの人間が『魔法』という力を使える。人々は魔法の使える人間を『新人類』と呼び、魔法の使えない人間の事を『旧人類』と呼んだ。無論、それらは旧人類が滅んだ後に使われるようになった。

教師にバレないように小さく欠伸をし、彼は周りを見回した。斜め前に座っている男子生徒——『竹芝裕也』^{たけしばゆうや}は、不快そうな顔で教師の話聞いていた。どうやら、歴史の授業は嫌いなのだろう、と白坂は予想した。

この様な歴史の授業は、生徒に人気がない。学んでも役にたたないし、何よりつまらないからだ。

そう考えながら、白坂は教科書の頁をめくった。

当然、白坂も歴史の授業はあまり好きではなかった。だが、新人類が旧人類を滅ぼした——その話には興味があった。

現在、その『新人類』が『旧人類』を滅ぼしたという出来事には様々な憶測が飛び交っている。本当はそんな出来事はなかったものの、全ての旧人類が滅んだ訳じゃないのだ。それらの憶測から察するに、まだ完全に旧人類は滅んだ訳ではない。だが、この世は魔法で成り立っている。例えばその旧人類狩りで滅んでいなくても、他の何らかの理由で滅んでいるだろう、と彼は考察していた。

聞きなれた電子音が鳴る。授業の終わりを示すチャイムだ。教師は二言三言告げると、教室を出ていった。

教科書を閉じると、白坂は椅子に座ったまま背伸びをした。中途半端に寝たせいだろう、逆に疲れが溜まってしまっていた。

「随分、お疲れみたいだね」

斜め前の男子生徒に話しかけられる。先ほど、教師の話を不快そうな顔をして聞いていた竹芝だ。

「竹芝か。そつちこそ、教師の話を不快そうな顔をして聞いてたじゃないか」

白坂は欠伸まじりに言った。

竹芝は一瞬戸惑った表情を見せた後、頭を掻いた。

「え、ああ。その、あまり歴史は好きじゃないんだ」

その竹芝の言葉は急遽取り繕った風だったが、白坂は気にせずと言う。

「俺もだよ」

白坂は閉じた歴史の教科書を手にしてから続ける。

「まあでも、中には面白い話もあるけどさ」

「旧人類狩り、とか？」

「そうそう。力無き者はこの世に不要、とでも思った集団が暴れた話だよ」

白坂は教科書を竹芝に向けた。同じ出来事に興味を持つ人間が居てくれたことが嬉しかったのだ。

「何とも、恐ろしい話だよ。それに、その集団もまだ捕まっていな
い」

白坂が話し終えた後、竹芝は不愉快そうな顔をして言った。

「まあ、魔法が使える人にとって、旧人類の存在は迷惑なんだろう
だったら、奴らを捕まえる必要がない」

白坂は言った。実際、魔法の使えない人々が滅ぼされた後、魔法の使える人々は露骨に『新人類』『旧人類』という差別用語を作った。魔法が使える人間にとって、魔法が使えない人間というのは猿なんかと同格だという意味だった。

「まあ、そうかも知れないけど」

竹芝は額を掻き、続ける。

「生き残った人たちにとつては迷惑だよな。その集団がまだ自分たちを狙っている可能性があるから、うかつに表に出れない。それに、この件で旧人類に対する批判の声が高まったんだ。集団が捕まったって――」

竹芝は白坂が首を傾げているのに気付き、言葉を止めた。

「ん、どうかした？」

竹芝は何かあったのかと周囲を見回したが、何もなかったことに気付くと再び白坂に顔を向けた。

「いや、お前も旧人類が全て滅んだと思っていないんだな、と思っただけだよ」

「え？ あ、ああ。前にどこかで聞いた事があるんだ。本だったわけ」

竹芝は苦笑いしながらそう答えた。

「ふーん、そつか。まあでも、結構知れ渡っている話らしいからな」
白坂は歴史の教科書を机の中にしまい、立ち上がった。

「さて、じゃあそろそろ行こうか。次、移動教室だろ」

白坂はそう言い、竹芝と一緒に教室を出た。

様々なポスター類が貼られた廊下を二人で歩く。同じ階にあった為、一分足らずで『魔法実験室』と書かれた教室に着く。二人が教師の近くにある椅子に隣合わせに座ったところで、丁度良く授業開始を知らせるチャイムが鳴った。

「はい、全員揃いましたね。では、これより今日行う試験の説明をします」

教師はこれから行う試験の話をした。今日は治療による試験で、瀕死状態の生物を治療する、といったものだった。

「死んだ生物を生き返らせるのって、確か違法じゃなかったっけ？」

教師の話聞いていた時、竹芝が横から小声で話掛けてきた。

死人を魔法によって蘇らせてはいけない、という法律が出来たのは魔法を使うのが一般的になった時だった。生まれて、苦しんで生

きて、死ぬ。そのような人間の本質を忘れてはならない、という様な理由があった。

「そうだけど、今回はあくまで死にかけの生物を生き返らせるだけ。まだ死んでないから合法なんだろう」

「へえ、そうなのか」

そう言い、竹芝は教師の方を向いた。

「にしても、急に難しくなったよね。今までは筆記テストとかだけだったのに」

竹芝は小声でそんな事を言った。愚痴にも似た感じだった。

「この手の授業は、日数が少ないからな」

白坂は小声で言った。

現代、魔法による治療は資格を持っている人間、或いは資格を持っている人間の許可が無いと出来ない。当然、治療系の授業を担当するには資格が無いといけない。だが、その手の資格を持つ人間は病院等で働く場合が多いので、担当出来る教師が少ない。よって、自然と治療系の授業日数は少なくなっている。

「では、これから試験を開始します」

教師は黒板を手の甲で叩いてから、再度試験について説明した。

「時間内に、死にかけの虫を治療して下さい。治療出来なかった場合は不合格とし、減点します。尚、『リング』による補助力を使い合格した場合も一、二点程減点されます。何か、質問がありますか？」

教師は、生徒たちを見渡した。そして質問がないのを確認してから続けた。

「それでは、テストを開始します。名を呼ばれた人、前に出てきて下さい」

そう言い、教師は黒板の前にある椅子に腰をおろした。

「白坂はどうするの？」

一人目の名が呼ばれた時、竹芝が横から話し掛けてきた。

「ん、何がだ？」

「いや、白坂は『リング』を使うのかな、と思つてさ」

竹芝はそう言つてから、黒板の方を見た。黒板の前の机では一人目の試験が行われている。

人は『リング』を使う事により、魔力を倍増させる事が出来る。人には潜在能力というものがある。それを引き出すのが『リング』という一見ただの手首輪にしか見えない道具だ。元々新人類と旧人類のハーフ——あまり魔力のない人間——用に作られたもので、現在では旧人類狩りの時に共に滅ぼされてしまったハーフに代わり、新人類が使用している。といっても強力な魔法を使った場合悲惨な事になる可能性が高いので、使つていいのは一部の軍隊と学生だけに限られている。

「ああ、その事か。使わない。使つと減点されるからな」

「そつか。まあ、白坂並みの成績だったらリングなんてなくても合格できるよね」

そう言つて竹芝は溜め息を吐いた。

「竹芝はどうなんだ。使うのか？」

「僕の成績は知つてるよね。使わざるを得ないよ」

竹芝は再度溜め息を吐いた。竹芝は魔法関連の成績が異常に悪い。下の下の魔法は使えても、下の中は使えない、と言つた感じた。その為、竹芝はリングを使わざるを得ない。だが、使つても合格出来る可能性は殆ど無かつた。

「では次、白坂君」

白坂の名が呼ばれる。椅子から腰を上げ、白坂は前に向かつた。

白坂は教師から最終の説明を受けた後、教卓の前に立つた。教卓の上には瀕死状態の小さな黒い虫が置いてある。瀕死状態の虫の上で手の平を広げ、彼は目を瞑つた。そして数秒後、彼は目を見開き、手を握つた。直後虫の周りが眩く光り、今まで瀕死状態で全く動かなかつた虫が、何事も無かつたかのように動き出した。

「白坂君、合格です。では、次は——」

机に置いてある紙に今の試験の評価を書く。そして教卓の上に居

る虫をペンで軽く突いてから、教師は生徒に向かってそう言った。虫は使いまわした。瀕死状態から回復しても、再び教師の手により瀕死状態にさせられ、また試験に使われる。虫にとっては無限地獄だった。

「凄いな。あんなに素早く出来るなんて。これは満点なんじゃないかな」

白坂が席に着くなり、竹芝は先ほどの試験の感想を述べた。

この試験では二つの項目を五段階で評価される。一つは魔法発動までの時間。もう一つは魔法の効果だ。どれだけ早く魔法を発動しても、虫が瀕死状態から完全に復帰していなければ点は低い。そのどちらも完璧だった白坂は、恐らく満点だった。

「まあ、小さな虫だったしな。あれぐらいなら頑張れば出来る」

「やっぱり、出来る人の台詞は違うなあ。あんなの、頑張っても出来ないよ」

竹芝は他の生徒の試験を見ながらそんな事を呟いていた。まあ、竹芝にとってはそうなんだろうな、と白坂は思った。

それから、二人は他の生徒の試験をじっと眺めていた。特に面白くはないが、雑談をして注意されるよりは良いだろう、と白坂は考えていた。

眺めている内に、白坂は殆どの生徒がリングを使っている事に気が付いた。確かに今回の試験は今までより難しい。リングを使わずに行い試験に不合格で点を取れないのより、多少の減点は気にせず、リングを使って試験に合格したほうが良い、と考える生徒の方が多いのだ。

「しかし、よくリングなんて使えるよな」

白坂は呟いた。恐らくその声は竹芝にさえ聞こえなかった事だろう。

白坂はリングの補助力というのが苦手だった。 α の力というのは使っていて気味が悪いからだ。これからどれだけ難易度の高い試験があるとも、リングの補助力は使わない、と白坂は決意してい

た。その為に、白坂は人一倍努力してきた。白坂が成績優秀なものには、その様な背景があった。

「では次、竹芝君」

竹芝の名が呼ばれる。竹芝は一度深呼吸をしてから立ち上がり、教卓に向かった。教師から最終の説明を受けた後、竹芝は教卓の端に置かれているリングを手首にはめてから、虫の上で手の平を広げた。そうしている時の竹芝の顔は不安に満ちていた。

治療試験（後書き）

この小説は去年の一月から十月にかけて書いていた小説『魔法の世界』の改訂版です。

最近何を書くこうかと悩んでいた時、何となく過去に書いた小説でも読んでみるか、と思い至り、この改定前の『魔法の世界』を読んだみた所、思わず笑ってしまいました。書いた自分でも何て書いているのか分からないし、苦笑しすぎだろこのキャラたち。普通に笑えよ、と思ってしまうたり。

恐らく改定前の作品を読んできた人は超能力者に違いません。さすがにこのまま放置は出来ないので、改定することにしました。文章力も一年半前から成長してと思います。まだ下手ですけど。この改訂版、序盤はあまり変えませんが、中盤以降の展開は大幅に変えていこうと思っています。なので改定前のを読んだことない人は勿論、改定前に読んでくれた人も読んでくれると嬉しいです。

奈三川 俊

放課後、白坂たちのクラス——二年三組は数人の生徒が居るだけで、静まり返っていた。机の上で、竹芝がうつ伏せになっていた。試験結果が散々だったため、落ち込んでいるのだ。

あの試験で竹芝は数分間をかけ魔法を発動しようとしたが、結局何も起こらなかったのだ。他の生徒も相当数不合格だったが、何れの生徒もリング未使用で良いところまでいつていた。リング使用で不合格になったのは竹芝だけだった。

「あまり気にするなよ。『虫が可哀想なので出来ません』なんて主張して不合格になったどこぞの馬鹿よりはマシだろ」

今回の試験では、何度も瀕死状態にさせるのは可哀想、と言って不合格になった生徒が居た。

「馬鹿とは酷いな。ちよつと冗談を言っただけじゃないか」

白坂の隣に立っている男子クラスメイト——『奈三川^{なみかわしゅん}俊』が不服そうに言う。どこぞ馬鹿とは奈三川の事だった。

「どうしてそんな冗談を言おうと思ったんだか」

白坂は肩をすくめた。心底呆れていた。

「まあ、白坂の言う通りだ。あまり気にするなよ。また機会はあるんだしさ」

奈三川はそう言っ教室のドアに向かった。白坂もそれに続く。

「じゃあ、俺たちは帰る。また明日な」

白坂は手を振りながらそう言い、教室を後にした。

「別にあんなに傷つくことないのにな。いつもの事だし」

階段を降り下駄箱に向かおうとしている途中、奈三川はそんな事を白坂に言った。確かに、いつもの事である。いつもは平然としているのに、何故今回だけあんなに落ち込んでいるのか。それがいまいち白坂たちには分からなかった。

「まあ、たまには落ち込みたい時だってあるんだろ」

白坂はそんな結論を出した。

「そうそう。これから暇か？」

下駄箱に着き、上履きから外履きに履き替えている時に奈三川は白坂に聞いた。

「これから？ 時に何も用事はないぞ。……あ、でも買い物をしていないといけないな」

白坂は母親から買い物頼まれていたのを思い出し、そう答えた。
「そうか。じゃあ丁度良いな。これから一緒にスーパーに行かないか？」

「近くのか？ それなら行く場所も一緒だから構わないけど……何か買うのか？」

白坂は首を傾げた。

「ああ。魔法に関する本を買いたいんだ」
「魔法に関する本？」

白坂は驚いたように目を見開いた。奈三川はあまり勉強が好きじゃない。試験であんな冗談を言ったのもそれならば頷ける。そんな奈三川が自分の意思で魔法に関する本を買いたいというのは、どこか違和感があった。

「そうそう。……そんなに驚くなよ。ほら、今日の試験に不合格だった生徒は補習があるだろ？ だからだよ」

ああ、と白坂は納得したように頷いた。今回の試験ではあまりに不合格者が多かったので、追試という形だけでなく補習も行われる事になったのだ。恐らく、奈三川はその補習に使う本を買いたいのだろう、と白坂は予想した。

「それは分かったが……何でそれ、竹芝が居る時に言わないんだよ」
奈三川と同じく、竹芝も不合格者だ。それなら、竹芝も連れて行けば良かったのではないか。

白坂が奈三川にそう提案すると、奈三川はばつが悪そうに頭を掻いた。

「あーっ、そうだった。すっかり忘れてた。でも、まあ、あれだ。」

お前もさつき言ってたろ。たまには落ち込みたい時もあるって。だから俺は誘わなかったんだ」

「はあ。それでいいのか？」

「いいんだよ。別に絶対必要って訳じゃないんだし。あつたら便利だな、っていう程度の存在だから」

奈三川は必死に弁解しようとしていた。そんなに弁解するなら今からでも呼びに行けば良いのに、と一瞬思ったが、白坂は敢えて何も言わなかった。今から呼びに行ってもどうせ落ち込んだままなんだろうな、と思ったからだ。

「うわ、随分寒いな。雪まで降ってる」

校舎を出るなり、奈三川は手を擦り合わせながらそう言った。外は寒く、雪がゆらゆらと降り続いていた。

「そういえば、もう十二月だもんな。この間まで夏だったような気がするのに」

白坂は手をポケットに入れながら返答した。手袋は持ってなく、寒さを凌ぐにはそうするしかなかった。

「だよなー。俺の家なんか、まだ七夕飾ってるよ」

「……いや、片付けろよ」

奈三川は『出した方がいいが片付けるのが面倒』という典型的な面倒くさがりである。

「それにしても、補習面倒だよなー。何でわざわざそんな事するんだか」

「そんな事言うなら、試験の時ちゃんとやれば良かっただろ」

竹芝ほどではないが、奈三川も成績が悪い。だが、リングを使用して試験に挑めば評価は最低点だろうが、一応合格は出来たはずだ。

「いやー、今日は何か少し体調悪かったし」

肩を回し、奈三川はそんな事を呟いた。絶対嘘だな、と白坂は確信した。

「つつか、そんな治療魔法を使えるようになってても意味無いよな。俺、絶対そういう職には就かないのに」

奈三川がついに試験の根本にケチを付け始めた。こうなったらただの駄々っ子である。

「ただだけ嫌いなんだよ、お前」

白坂は呆れながらも続ける。

「それに合格して点数稼がないと進級できないだろ」

「いいよなあ、そういうのが得意な奴は」

奈三川は肩をすくめた。俺にはもう無理だ、とでも伝えたいのだからかと白坂は思った。

そんな話をしているうちに、スーパーに着く。中に入ると、暖かさが二人の身体をやさしく包み込んだ。

「おーっ、暖かいな。気持ち良いぜ」

奈三川は立ったままの状態で目を閉じ両手両足を広げ、大の字になった。傍から見たらただの変態だ。

「そんな事してないで、はやく行こうぜ」

もう寒さを凌ぐ必要がなくなり、ポケットから手を出した白坂が言った。

「待て。もう少し余韻に浸らせてくれないか」

夕方とあって、客が多い。出入り口の客は、奈三川に奇異の視線を向けていた。やがて目を開けた奈三川がそれに気付く。白坂と奈三川は愛想笑いを浮かべながらその場を後にした。

二階にある書店に向かう。魔法に関する本を置いてある空間を見るなり、奈三川は感嘆の声を漏らした。

「へえ……魔法に関する本って、こんなに多いんだな」

「何だ。来たことないのか？」

「書店に来たことは何度かあるけど、魔法に関する本を買うのは初めてだからな。まさかこんなに種類が多いとは思わなかった」

近場に置いてある本を持ち上げてから、奈三川は言った。

この世の中は魔法が主流だ。しかし、魔法という新人類が手にした能力はまだ完全に解明できていない。一部の研究者が二割も解明できていないのかも知れない、と発言する程だ。その為、魔法に関

する本が多い。この書店に置いてある本も、恐らくは氷山の一角だった。

「しかしこんなに多いと、何を買えば良いか分からないな。取り敢えず適当に買ってみるか」

そう言い近場にある本に手を伸ばす奈三川を、白坂は制止した。

「そんなに買う必要は無いだろ。教科書の内容だけで充分合格できるんだから。買うなら補助教材みたいな薄い教科書で問題ないはずだ」

白坂は周囲を見渡しながら本棚の間を進んで行く。そしてある地点で止まると本棚から一冊、本を取り出した。それを奈三川に差し出す。本の表紙には『治療魔法を学ぶ』という題名と出版社、著者名が書かれていた。

「何だ、これ？」

奈三川は首を傾げる。

「見たら分かるだろ。治療魔法に関しての本だ」

そんな奈三川に向かって白坂は本の説明をした。

「ああ、そうなのか。でもこれ、薄くないか？」

白坂の持つ本の厚さを確認してから奈三川は言う。確かにこの本の厚さは数ミリメートルと薄い。本当はもっと分厚く説明が詳細な本もあるのだが、別に奈三川は治療魔法について詳しく調べようとしている訳ではない。試験にいい点数で合格する為に買うのだ。高校生レベルの治療魔法なら、これぐらいの本で十分な筈だった。

そう白坂が説明すると、奈三川は納得したように頷き、その本を受け取ってから会計に向かった。

会計を済ませた後、二人は一階にある食料品売り場に向かった。

白坂の買い物を済ませるためだ。白坂は鞆からメモを取り出し、それを見ながら買い物を始める。そこには今日買すべきものが書かれていた。どうやら今日は肉を使った料理らしい、と白坂は予想した。「その肉より、こっちの肉の方が良いんじゃないか？」

殆どの買い物を終え、肉売り場で何の肉を買おうか悩んでいた時。

本の入ったレジ袋を手に提げた奈三川が横からそんな事を言った。その目線の先には高い上質な肉があった。

「いや、無理だ。あんなの高すぎる」

白坂は首を左右に振り、目の前に置いてある肉を二つ、手に取った。安物の国産肉だ。

「俺は質より量を優先するんだ。奈三川だつてそうだろう？」

二つの肉を買い物カゴに入れながら白坂が言う。買い物カゴは既に品物で溢れていた。

もう買すべきものは全て買った。白坂は会計を済ませ、二人同時にスーパーを出た。

「白坂つて、いつもああやって買い物したりするの？」

冬の寒々しい黄昏時。白い息を吐きながら、奈三川は白坂に聞いた。

「まあ、度々頼まれるからな。よく買い物する。それがどうかしたのか？」

食料品の入ったレジ袋を両手に提げた白坂が答える。外は寒かったが、荷物のせいでポケットに手を入れて寒さを凌ぐ事は出来なかった。

「いや、何となく。買い物が上手だなーって思ったからさ」

「買い物に上手いも下手もあるのか？」

奈三川のその発言に、白坂は呆れたように首を傾げた。

「いや、何て言うんだろ。何か迷いがないっていうかさ。俺だったら絶対どこに何があるか分からずに迷うだろうけど、白坂はそんな事なかったからさ」

奈三川は一瞬戸惑った後、白坂の疑問にそう答えた。

「それは上手い下手というのとは違うと思うが……まあ、少なくとも奈三川よりは買い物してるからな。慣れてるんだろ。竹芝よりは少ないと思うけど。殆ど毎日買い物してるからな、竹芝は」

「そうか。まあ、竹芝は一人暮らしだもんな」

奈三川は頷いた。竹芝は数年前に両親が事故か何かで死んでしま

つたらしく、一人暮らしだ。叔父から仕送りを受けて、それで何とか生活している、と以前竹芝は言っていた。

「それにしても、一人暮らしで大変そうだな」

信号の前で立ち止まってから奈三川が言う。白坂もそれに続いて立ち止まった。

「そりゃあな。でも竹芝はあまり困らないと――」

白坂はそこまで言いかけて、口を閉じた。前方を、目を細めて見ている。

「ん、どうしたんだ？」

それを不審に思ったのか、奈三川は白坂に尋ねた。

「あれ、竹芝だよな？」

白坂が前方を人差し指で示す。そこには竹芝が居た。先ほどの落ち込みとは一変、何食わぬ顔で歩いている。

「あ、本当だ。噂をすれば何とやらだな」

奈三川は白坂が指で示す先に居る竹芝を見てから言った。

「あれ。竹芝の家の方向って、確かこつちじゃないよな」

「何、本当か？」

白坂が何気なく呟いた事に、奈三川は猛烈に反応した。

「ああ、本当だよ。何度か家に行った事があるからな。記憶が正しければだけどな」

竹芝の家は学校から見て西側に、二人の家は東側にある。明らかに方向が正反対だった。

白坂のその発言を聞き、奈三川は唇を舐めた。

「恐らく、女だろうな」

奈三川が呟く。それを聞き、白坂は首を傾げた。

「どういう事だ？ あの竹芝は女装してる、とでも言いたいのか？ 意味が分からないぞ」

「違う。そういう事じゃない」

奈三川は首を左右に振り、それを否定してから続ける。

「よく考える。教室であれだけ落ち込んでいた竹芝があれだけ元気

になっている。その理由は、女ぐらいしか考えられない」

「つまり、これから竹芝は彼女にでも会いに行く、とでも言いたいのか？」

どんな思考回路だ、と白坂は呟く。

信号が赤から青に変わる。横断歩道の近くで数台の車が止まる。

「知りたくないか」

横断歩道を渡ろうと足を踏み出した白坂に向かって奈三川が言う。
「何をだ？」

横断歩道を渡るのを止め、白坂は首を傾げた。

「竹芝があれだけ元気になったのはどうしてか、をだ」

「まあ、興味があるが……もしその理由が彼女だったらどうするんだよ」

後頭部を掻きながら白坂は奈三川に聞いた。

「ははっ、決まっているだろう」

奈三川は一瞬笑ってから手を強く握る。

「竹芝の醜態を彼女に晒す……！」

奈三川は吐き捨てる様に言うと、竹芝の尾行をするべく歩き出した。奈三川は恋人の居る奴が大嫌いだった。自分に恋人が居ないからという、ただの嫉妬だ。だから白坂は本当は彼女が居るのに、それを奈三川や竹芝に話せずにいた。

幻想魔法

白い息を吐き、白坂は奈三川の後ろを歩いた。奈三川はかなりの速度で歩いている。

「あまり先に行くなよ。こっちは重い荷物を持ってんだぞ」

白坂は奈三川に向かってそう怒鳴った。だが奈三川は何食わぬ顔で立ち止まり、後ろに振り向いた。

「こっから先、何か良い建物とかあったか？ 待ち合わせに使えそうな」

「こっから先？」

ようやく奈三川の元に辿り着いた白坂はレジ袋を降ろし、せわしく呼吸をしながら前方を見た。竹芝が赤になった横断歩道の前で立ち止まっている。

「さあ。ちよつとした食事店とかならあった気がするが……。ここら辺はあまり来ないからな。よく知らない」

白坂はそう答えた。既に白坂や奈三川の家とも違う方向に来ていた。

「うーん、そうか。ホテルでもあれば確定なんだけどな……」

そう呟きつつ、奈三川は再び歩き出した。既に信号は青になっていた。白坂はレジ袋を両手に提げてから奈三川と竹芝の後を追った。白坂の言った食事店から五百メートル程先にある図書館で、竹芝は足を止めた。二人は物陰に身を隠す。いつ見付かるかという緊張感からか、二人はたった数百メートル歩いただけなのに息をあげていた。

「これから図書館に入るのか？」

物陰から竹芝の様子を探り、白坂は呟いた。

「どうだろうな。図書館に彼女でも居るのかも――」

奈三川がそうこう言っている内に、竹芝は図書館の中に入ってしまった。

「けど図書館で待ち合わせなんてしないか？　あまり騒ぐことも出来ないし」

「いや、分からない。まあ、何れにせよ俺たちがあーだこうだ言い合っても無意味だ」

奈三川は物陰から姿を出す。

「見つけて吐き出させれば良いだけなんだから。行くぞ！」

奈三川は図書館までの数十メートルという距離を全力疾走で駆け抜けた。

白坂はため息を吐いてからレジ袋を両手で持ち上げ、図書館に向かった。

一分弱を掛け、白坂は図書館の入り口に辿り着いた。奈三川は入り口の前で白坂が来るのを待っていた。

「お前、何で走ったんだ？」

白坂はそんな奈三川を見て疑問に思った。

「お前が走ってこないから待ってるんだ。さあ、行くぞ」

奈三川はそう言い、図書館に入っていた。白坂もそれに続く。

二人は中に入るなり、さっと図書館内を見渡した。

「居たぞ」

奈三川が白坂の肩を軽く叩きつつ、言った。

白坂は奈三川の視線を追う。椅子に座る竹芝の姿が見えた。白坂は竹芝の周囲を見る。彼女らしき人物は居なかった。

「彼女の姿が見えない。やっぱり、彼女が居るとい話はただのお前の妄想——」

白坂が言い終わる前に奈三川は動き出していた。

「竹芝。こんな所で何をしている？」

奈三川が椅子に座って読書をしている竹芝に話掛けた。

「ん、奈三川？　何でこんな所に居るの？」

突然の出来事に動揺したように竹芝は言った。

「とばけるのか？　吐いたらどうだ。こんな——」

奈三川が顔を近付けて言う。だが白坂は言い終わる前に、奈三川

の頭を「いい加減にしろ」と言いながら叩いた。レジ袋は下に置いてある。

「白坂まで。一体何の話？」

竹芝は不思議そうに首を傾げた。

「お前、彼女に会いにここに来たんだろ」

奈三川が言う。

「え、彼女？ 何の話？」

「とぼけるな。お前、彼女がいるんだろ？」

「いや、何のことかさっぱりなんだけど」

「だから——」

二人の会話をじっと聞いていた白坂は軽いため息を吐いた後、奈三川の後頭部を叩いた。

「いたっ……何するんだよ」

奈三川は叩かれた部分を押さえながら言う。

「お前が何してんだ。急にそんなに詰め寄っても何のことか分からないだろ」

「それで……何の話？」

竹芝は困惑した表情で白坂に尋ねた。

「その、何だ。実はさ——」

白坂は竹芝に説明をした。二人がここに居る理由。先ほどの奈三川の話の意味などを。

「つまり、自分に彼女が居ると思って尾行してきたってこと？」

白坂の説明を聞いた竹芝は復唱した。二人はそうだ、という様に頷いた。

「……随分暇みたいだね」

竹芝が呟く。少し呆れ気味だった。

「否定はしない。暇だもん」

奈三川がそんな事を言いながら白坂の方を見る。

「言っとくが、俺が提案したんじゃないからな」

白坂は奈三川の視線を受け、そう言った。

「仕方がない。あんなに落ち込んでたのに元気になっているお前が悪いんだ」

奈三川は椅子に腰を降ろし、竹芝に向かって言った。

「意味が分かん」

白坂はそう言い、奈三川の隣の椅子に腰を降ろした。

「それで、竹芝は図書館で何をしているんだ？」

白坂は竹芝が先ほどまで読んでいた本に目を向け、そう聞いた。

魔法に関する本だという事は確認できた。

「ああ、これ？」

竹芝は目の前にある本に視線を落とし、続ける。

「これは魔法に関する本だよ。魔法を無力化にする魔法があるのって、知ってるか？」

その竹芝の言葉に、奈三川は首を傾げた。だが白坂は思い出したかのように「ああ」と呟き、頷いた。

「知っているが、それがどうかしたのか？」

白坂は竹芝に言う。

「その魔法について学んでいるんだ」

竹芝は目の前にある本を閉じ、白坂に向けて差し出した。年代物なのだろう。表紙の文字は劣化していてよく読めなかった。

「学んでいる？ 何だってそんな存在しているかどうか分からない魔法（幻想魔法）を？」

白坂が首を傾げるのと同時に、奈三川は額に手をやり唸りだした。「ちよつと待て。何だ、その魔法を無力化にする魔法って」

奈三川は白坂に向かって尋ねた。

「何だ、知らないのか。まあ、そのままの意味だよ。魔法を無力化——使用不可に出来る魔法だ」

白坂は竹芝との会話を一旦止め、奈三川の質問に答えた。

「何だって？ そんな魔法があるのか。……その魔法、危険すぎないか？ この世の中は魔法で成り立っているのに。そんな魔法を使われたら世界は混乱するだろ。規制とかされないのか？」

奈三川はそんな疑問を白坂にぶつけた。確かに、この世は魔法で成り立っている。車は魔法で動いているし、物を作るにも魔法を使う。魔法がなくなってしまうたら世の中は混乱する。

「確かにそうだ。だけど、その魔法は『幻想魔法』なんだ。規制はされないだろ」

幻想魔法。まだ魔法の全ては解明されていなく、どんな力が使えるのか使えないのかが分かっていないが、恐らく全てが解明されても使うことは出来ないだろうとされている魔法——力の事だ。魔法を無力化する魔法というのには矛盾がある。魔法を無力化にしてしまったら、その『魔法を無力化にする魔法』自体が無力化されてしまう筈なのだ。だから幻想魔法扱いになっている。

例え、どんなに危険な魔法であってもある程度の幻想魔法はどこでも学ぶことが出来る。恐らくその本に書いてある内容も、殆どはデマだろう。

でも、何でそんな魔法を学んでいるんだ？ そう白坂が再度問うと、竹芝は本を机の上に置き、答えた。

「何だろ。本当に幻想魔法なのか確かめたくなくてさ。それで学んでる」

「何か適当な理由だな……。それで、どれくらいその魔法を学んでいるんだ？」

白坂がそう聞くと、竹芝は虚空を見つめて指を折り始めた。

「大体……十年ぐらいかな。よく覚えてないけど」

「十年かー。十年前って旧人類が滅んだ年だよな。随分長く学んでいるなー」

奈三川は間抜けな声でそうコメントした。十年前というと、竹芝たちがまだ小学校に入って間もない頃だ。

「十年……。いやお前、幻想魔法じゃなくて普通の魔法を学んでいたら不通に優等生になれたんじゃないか？」

白坂は肩をすくめた。盛大に道を踏み外したな、と思ってしまっていた。

「そうだけど……まあ、こっちの方が楽しいし」

竹芝はさつき目の前に置いた本を開いた。

「そっか」

白坂は頷きながらそう言った。竹芝の人生なのだ。しかも既に十年も費やしてしまっている。ここで否定的な事を言ってその十年を台無しにするの清々しいことではない。だから白坂はそれ以上の事は言わなかった。言わなくても十年が台無しになるのは殆ど確定的ではあったが。

「それじゃ、俺たちはもう行く。まあ、頑張れよ」

白坂は立ち上がる。レジ袋を持ち上げる前に、竹芝にそう言いながら手を振った。奈三川もそれに続き立ち上がり、手を振る。

「それじゃあ、また明日の補習で」

竹芝もそう言い、二人に向かって手を振った。

「はあ。何で俺たち、尾行なんかしたんだろうな」

外に出てから、奈三川はため息まじりの愚痴をこぼした。

「お前が提案したんだお前が」

白坂はため息を吐きながら言った。

「だよな」。何であんな提案したんだろ。あいつに彼女なんて居る訳無いのにさ」

奈三川はうなだれた。だがすぐに顔をあげ、白坂を見た。

「それより、幻想魔法……か。あれって都市伝説みたいなもんだろ？　よくそんなものを何年も学び気になるよな」

何せ使えない、とされている魔法である。学ぶとはすなわち、ゴールのないマラソンを始める様なものだ。誰だってやるうとは思わない。

「でも、これでもし使えることが判明したら凄いことになるよな。他の幻想魔法も使える可能性が出てくる。そんな事になったら規制が酷くなるかもな」

大抵の幻想魔法は強大な攻撃魔法だ。それらは人には扱えないというような理由で幻想魔法扱いになっている。その様な幻想魔法は

『魔法を無力化にする魔法』みたいにどこの図書館にも置いてある、みたいなものではないが、もしそれらが人間にも使えるという事が判明したら、今より規制は酷くなるだろう。魔法による犯罪が増えるのは目に見えているからだ。

「まあ、使えないから幻想魔法なんだけど」

奈三川はそう言い、足を止めた。そして白坂に言う。

「じゃあ俺、家こつちだから。またな」

「ああ、そうなのか。またな」

二人は手を振り合い、その場で解散した。

追試

休日の昼下がりの教室。冬ではあるが日が射しており、教室は暖房がなくとも暖かい。

前回の治療試験で合格できなかった生徒には補習と追試が残っている。不合格者は十七人。その補習と追試を行う日が今日だった。

「治療魔法は簡単に扱えるものではありません。虫のような小さな生物を治す事は学生でも可能かもしれませんが、人間などの生き物の大きな怪我を治癒するには多大な集中力と魔法力が必要です。…

…分かりましたね、奈三川くん」

治療魔法を担当する女教師がホワイトボードをペンで叩きながら言う。名指しである。

「……分かってますよ」

奈三川が頬杖を付きながら気だるそうに答える。あの試験以来、この治療魔法を担当する女教師はことあるごとに奈三川に絡んでいる。そんな変な事は言っていないのにな、と奈三川は補習を受けながら思った。

「魔法力は皆さんご存知の通り、魔法を使うのに必要な力です」

魔法力は新人類の身体にあるとされている魔法を使うときに消費する力の事だ。それが無いと人々は魔法を使うことが出来ない。だから旧人類は魔法が使えないのだ。

「魔法力は体力と同様、鍛錬すれば底上げが可能です。恐らく、今回あなた達が試験に合格できなかったのはこの魔法力が足りなかったからでしょう。リングを使った殆どの生徒が合格できたことからそれは間違いありません」

そう言って女教師は教卓の上に置いてあるリングを手にする。リングを使って合格できなかった生徒は竹芝だけだ。

「という訳で、今回の追試では全員にリングを使って試験してもらいます。しかし、今回の追試ではリング使用による減点はしません。

その代わり、最高点が十から八になりますけど。……分かりましたか、奈三川くん」

「またもや女教師は奈三川に向かって言う。その場に居る奈三川以外の十六人の生徒がくすくすとそれを聞いて笑っている。竹芝もその中に含まれていた。」

「分かってますから先生、他の生徒の事も気にしてあげてください」その笑いに耐えられなくなり、奈三川は冗談まじりにそう言った。だが、女教師はそれを無視した。聞こえていないんじゃないか、と思ってしまう程に自然だった。

「では、これより追試を行います。方法は前回説明した通りです。名前を呼ばれた人、前に来てください。最初は――」

「追試が始まる。奈三川はため息を吐き、椅子の背に寄りかかった。そうした体勢のまま順番が来るまで待つ。」

「では次、奈三川くん」

奈三川の名前が呼ばれる。奈三川は椅子から立ち上がり、教卓に向かった。近くにあるリングを手に取り、手首に付ける。

目の前には瀕死状態の小さな虫が鎮座している。前脚は鎌状に曲がっている。

奈三川は虫の上で手の平を広げ、目を閉じる。集中し、奈三川は目を見開いた。直後、虫の周りが眩しく光る。治療魔法に成功したのだ。その証拠に、瀕死状態だった虫は何もなかったかのように教卓の上で慌ただしく動いていた。

「やつ――」

奈三川がそう喜びの声を上げようとした瞬間。教卓の上に居た虫はその前脚の鎌を奈三川の腕に向かって振っていた。

「全く……何だよあの虫。助けてやった恩があれば……やつてらんないぜ」

奈三川は虫に斬られた腕を掴みながら歩き、そう呟く。

「まあ、そういう事もあるよ。それより大丈夫？」

竹芝が奈三川の横を歩きながらそう心配の声を投げかける。

奈三川は虫の鎌攻撃により腕を怪我してしまった。最初は保健室にある道具で応急処置をしたが、思いのほか傷が深く、結局病院に行く事になってしまった。

「少し痛むけど、一応は」

奈三川はそう返答した。

暫く歩き、病院に着く。大きく、比較的に新しめの総合病院。近くにはこの病院しかなかった。

中に入り、受付を済ましてから席に着く。結構混んでいた。

奈三川は怪我した腕をじっと見ていたが、ふと顔をあげた時、一人の少女が視界に入った。

可憐な黒長髪の華奢な少女。その姿に、奈三川は見惚れていた。休み明けの月曜日。白坂はいつもの様に通学した。

いつもの道をいつものように歩き、二十数分後、学校に着く。下駄箱に着いた時、竹芝の姿が見えた。

「おはよう」

白坂は小さく手を挙げる。白坂の存在に気付き、竹芝も手を小さく挙げた。

「あ、おはよー」

外履きから上履きに履き替え、階段を上る。二人の教室は三階にあった。

「そういえば、休日に補習があっただろ？ 治療試験の。大丈夫だったのか？」

階段を上っている途中、白坂は竹芝に言う。

「うん。追試もだけど……やっぱり無理だったよ」

竹芝は頭を掻きながらそう答えた。

「補習をしても、か……。まあ、あまり気にするなよ」

三階に着く。教室のドアの前で白坂は竹芝に言った。

「うん。そんなに気にしてないよ。いつもの事だし」

「いや、でも全く気にしない、というのも問題だからな」

そう言いながら、白坂は教室のドアを開けた。

「いよつす！ おはようつす！」

教室に入るなり、奈三川が飛び出し、挨拶をしてきた。異常に気分が良いらしい。

「どうした奈三川。酔ってんのか？」

「何言ってるんだよ。俺は未成年だぜ」

奈三川は左の手の甲を右の手の平で叩きながら全身を揺らしていた。気持ちを上手く言葉で表現出来ないが故の行動だった。

それを傍目に、白坂は鞆を置くため、自分の机に向かった。数人の生徒がヒソヒソと奈三川を見ながら何かを話しているのが見えた。「そっか。白坂は知らなかったよね」

竹芝は奈三川の異常についての理由を説明した。

昨日の追試の時に奈三川は怪我をしてしまい、竹芝と共に病院に行った。

その時、病院で奈三川は一人の少女と会った。その少女に奈三川は一目惚れし、告白した。

そして少女はある条件を出し、それを満たしていれば付き合う、というような事を言ったらしい。

「……何であいつは病院で告白してるんだ？」

明らかに場所がおかしいだろ、と白坂は呟いた。

「まあ、入院してたみたいだし」

竹芝は言った。

「尚の事おかしいが……それで、その条件って何なんだ？」

肩をすくめつつ、白坂は竹芝に聞いた。

「治療資格だよ。それを持っていれば付き合うつてその少女は言った」

治療資格は魔法治療を行う場合に必要となる資格の事だ。これを持たずに治療を行った場合は違反となり、罰せられる。

「奈三川って治療資格……持って無いよな」

白坂は奈三川を見て続ける。

「じゃあ奈三川は振られたのか。それなのにあんなに明るくしてる

なんて可哀想だな」

そう言い、白坂は自分の椅子に腰を降ろす。

「いや、付き合うらしいよ」

竹芝も自分の椅子に腰を降ろした。

「はあ。どういう事だ？」

「来週、治療資格の証明書を見せるとか何とか言ってたけど」

何を考えているんだ、と白坂は思った。奈三川は治療資格を持っている。それなのに――。

「いや、それより。何で治療資格持ちじゃないといけないんだ？」

白坂は首を傾げて、竹芝に尋ねた。一緒に病院に行った竹芝なら知っているだろう、と白坂は考えていた。

「何か、生まれつき心臓とかが悪くて、魔法による治療を定期的にしないといけないみたい」

「ああ、なるほど」

白坂は納得したように頷いた。それなら、病院に居た理由も納得出来る。

「それじゃあ付き合うのは無理だな。次の治療試験って確か今週だろ？」

「何を言っているんだ？」

後ろから奈三川が話掛けてくる。

「その今週の試験で、資格を取ればいいじゃないか」

振り返ると、奈三川が親指を立てているのが見えた。

「お前、その治療試験がどれだけ難しいか分かって――」

白坂が言い終わる前に、奈三川は自分の机に向かっていった。

「おい、どうしたんだ。無視するなよ」

白坂は奈三川の後ろ姿に話し掛けた。

「俺はもう帰る。こんな所で勉強したって意味がないからな」

奈三川は鞆を担ぎ、手を振りながら教室を出て行った。

「何しに学校に来たんだよあいつ」

白坂は呆れながらそう呟いた。

「奈三川大丈夫かな？ 資格取るみたいだけど」

「いや、無理だろう」

心配そうに言う竹芝に向かって、白坂はそう首を振った。

「治療魔法の資格試験っていうのは、才能がある人でも最低二年勉強しないと合格できないって言われる程難しい。才能もなく、一週間も時間がないんだ」

白坂は鞆の中から教科書を手に取り、机の中にしまった。

「そんなに難しいんだ。じゃあ、奈三川には無理だね……」

「残念だけど、そういう事になるな」

白坂は尚も教科書を机にしまいながら、そう答えた。

治療魔法

「えー、これから帰りのホームルームを始めたいのですが、日直である奈三川くんが今日は帰ってしまつて居ません」

この組の担任である山久は黒板の『今日の日直欄』を左の手の甲で叩きながら言った。その手の甲には若干の力が籠っているように思えた。山久は朝のホームルームで奈三川が既に帰ったことを知ると、かなり怒った様子で『今日の欠席欄』に奈三川の名前を書いていていた。恐らく来たのに途中で帰ったことに腹を立てたのだろう。全くもって教師に嫌われる奴だな、と白坂は思った。

「ですので、今日の帰りのホームルームは学級委員の柳原さん、頼みます」

はい、と学級委員は言い、席を立つた。

帰りのホームルームは明日の予定確認、今日の活動報告、そして教師からの話で終わった。

「では、今日はここまで。帰りが早いといって、寄り道はしないように。以上」

山久はそう言い、さようならの挨拶をした。皆もそれに続いて挨拶をする。

「午前中に下校なんて、楽でいいよな」

白坂が斜め前に居る竹芝に話掛ける。

今日は修学旅行に関しての職員会議がある為、生徒は午前授業だった。

修学旅行まで残り一ヶ月を切っており、準備も進められている。そうだね、と言いながら竹芝は鞆を肩に掛けた。

白坂も鞆を肩に掛ける。そうしてから、二人は教室を出た。

「奈三川、どうなんだろう」

竹芝が歩きながら言う。授業中や休み時間は特にそんな話をすることはなかったが、やっぱり失敗しているんだな、と白坂は思った。

「既に諦めているかも知れないな」

「まあ、相当難しいって聞くもんね」

二人はそう言いながら階段を下りる。

「それにしても資格がなかったら付き合えないってのは何だか悲しいな」

下駄箱の前で靴を履き替えながら、白坂はそんな事を呟いた。

「仕方がないよ。治療資格がなかったらその女性は生きていけないんだし」

「というよりそもそも、治療資格があっても奈三川に治療は出来ないよな。そんな高度な治療魔法は使えないだろうし」

白坂は言った。治療資格は治療をしても良い、という資格の事だ。それを持っているからといって高度な魔法が使えるようになる訳ではない。

「確かに……そうだよな」

校舎を出た時、竹芝はそんな事を言った。

「あつ、僕はあっちの門から帰るから。じゃあね」

竹芝は手を振り、西側にある門に向かった。

「そうか、竹芝はそっちだったな。それじゃあ、また明日」

白坂も手を振り、東側にある門に向かった。

奈三川は自分の部屋にある机に向かい、頭を抱えていた。資格試験の内容が難しすぎるからだ。

「魔法語なんて読める訳がないだろ……」

そうやって買ってきた過去問の本を部屋の隅に追いやったのは既に数時間前の事だ。

魔法語。旧人類の使用していた英語に変わり登場した世界共通語の事だ。今となっては学校での必須科目になっているが、奈三川はその魔法語が苦手だった。

奈三川はため息をつき、椅子の背にもたれ掛かった。

——どう考えても、現時点で合格など夢のまた夢だ。

そうした体勢のまま、奈三川は天井を見ながらそんな事を思う。
「仕方がない」

奈三川は呟く。そして近くに置いてある携帯電話を手に取り、メモリを開く。『白坂』を選択し、奈三川は発信ボタンを押した。
「もしもし」

数秒後に電話が繋がり、声が聞こえた。

「ああ、白坂。今暇か？」

「暇っていつか、今は下校途中。それより、授業サボって良いのか？ 山久、怒ってたぞ」

奈三川はそれを聞き、唾を飲み込んだ。山久が怒るとどれだけ恐ろしいのか知っていたからだ。

「いや、それより」

奈三川は首を振り、続ける。山久の恐さなど今はどうでも良かった。

「白坂って魔法語読めるよな？」

「読めるは読めるが——」

電話越しにああ、と納得したような呟きが聞こえる。

「確か治療資格試験の問題は魔法語で書かれているもんな。読めなくて苦戦してるのか」

「そうなんだよ。それで、教えてもらいたいんだけど良いかな？」

「別に構わないが……俺なんかに聞くより、普通に教師に聞いた方が良いんじゃないか？ 魔法語についても治療魔法についても」

白坂はそんな提案をした。確かに白坂は魔法語が読めるが、日常会話程度だけだ。それなら魔法語の教師に教わったほうが良いのは明らかだった。

「何、治療魔法の教師に教えてもらった方が良いだと？ これはまさか教師と禁断の恋愛という伏線か——！？」

「ふざけているなら切るぞ？」

白坂は真面目な声色で言った。

「……ごめん。でも、それは無理なんだ。そもそも教師の話が理解

出来ていたら魔法語なんて読んでいる筈だし、治療魔法の教師とは何か変な感じになってる」

奈三川はそう答えた。

「お前は何をしたんだ。……まあ別に構わないが、今どこに居るんだ？ 家か、それとも図書館か何かか？」

「普通に家だ。待つてるよ」

今すぐ行くという返答を聞いてから、奈三川は携帯電話を閉じた。数分後、玄関のチャイムが鳴る。奈三川は玄関に向かい、ドアを開けた。

外に立っていたのは紺色のコートを着た白坂だった。

「おお、よく来てくれたな。あがってくれ」

白坂は軽く会釈し失礼します、と言いながら奈三川の家に入る。

「それで、魔法語が読めないんだって？」

白坂は玄関のドアを閉め、鍵をした。

「そうなんだよ。魔法語が読めなきゃ話にならないのに」

奈三川は奥の部屋に入り、茶菓子を持って戻ってきた。

「何だ、別にいいのに」

「魔法語教えて貰うっていうのに、何にも無しっていうのも失礼だしさ」

奈三川は玄関の近くにある自分の部屋のドアを開けた。奈三川の家はマンションで、父と母との三人暮らしだ。

白坂は紺色のコートを脱ぎ、玄関に置いてから奈三川の部屋に入った。

「それで、どこら辺が分からないんだ？」

白坂は部屋の隅にある机に向かいながら奈三川に問う。

「まあ……全部かな？」

その言葉に、白坂は思わずため息を吐いてしまった。

「なあ、奈三川。どうしても試験を受けるのか？」

白坂は先ほど奈三川が持ってきてくれた茶を啜る。

「当たり前だよ。これに合格しなかったら付き合えないんだからさ」

奈三川は机の上に散乱しているプリントをまとめてから手に持ち、床に腰を降ろした。

「よく考えてみる。今現在、お前は魔法語を全く理解出来ていない。それを理解し、治療資格の勉強をするのにどれだけ掛かると思っている」

「それが簡単じゃないのは承知している。でも、やれるところまでやってみたい」

奈三川も茶を啜り、そんな事を言った。だが既に諦めている訳ではない、という事は白坂にも分かった。

「一週間足らずでか。一つ思ったんだが理由を素直に話して、半年後にある試験でやるっていうのは出来ないのか？」

「俺が嘘付いてたって知ったら、どうなるか分からない」

奈三川は首を振った。そんなに恐ろしい女性なのだろうか、と白坂は疑問に思った。

「どうしても今度の試験で合格するしか無いのか。全く、嘘なんて付くから」

白坂はため息を吐いた。

「状況が状況だったんだ。それより一つ凄い事を思いついたんだけど、どうだろうか」

何だ？ と首を傾げながら茶を啜った。

「白坂が魔法で俺に答えを教えてくれればいけるんじゃないのか？」

奈三川のその発言を聞くと、白坂は呆れたように肩をすくめた。

「俺をここに呼んだ理由はそれなのかよ」

「違う違う。今思いついたんだ。なあ、これならいけるだろう？」

試験中、白坂が問題の答えを魔法で教えるんだよ」

懇願の目をする奈三川を見て、白坂は首を振った。

「その計画、穴がありすぎるぞ」

「え？ そりゃあ今考えたやつだから穴はあるだろうけど………どこが？」

「確かに、そういう魔法は一週間足らずで使えるようになるだろう。」

だが、肝心の問題はどうかやって教えるんだ？」

あつ、と奈三川は声を漏らした。

「お前が俺に資格試験の問題を教えられない限り、こっちだって答えの教えようがない」

白坂はそう言った。

「じゃあ、俺もそういう魔法を使えるようになれば――」
「それは無理だ」

奈三川が言い終わる前に、白坂は首を振った。

「資格試験会場では魔法を無力化にする魔法磁場がある。魔法使用禁止というより、魔法の使用が不可能なんだよ」

魔法を無力化にする魔法磁場。それは試験会場だけではなく、普通の街にも設置されている。魔法による事件が起こった場合即座に魔法を無力化にする為だ。魔法磁場は普通の道具であり『魔法を無力化にする魔法』みたいな矛盾は発生しない。

「何だよ、魔法は使えないのか」

奈三川は落胆したような声を漏らした。

「そんな変な事を考えるより、普通に勉強するのが一番だ」

「ああ。それより、何で問題が魔法語で書かれているんだろうな。意味分かんないぜ」

奈三川は手に持ったプリントを眺めながらそう愚痴を漏らした。

「治療魔法を学ぶには魔法語が読めないといけないからな。というより、全ての資格試験では魔法語が使われているぞ」

白坂は茶を床に置き、奈三川の疑問に答えた。

「さて、じゃあ勉強を始めるか。基本から教えた方が良いか？」

「そうして貰えると嬉しいな」

白坂は奈三川からプリントを受け取った。そこには魔法語に関する基礎知識が書かれている。白坂はそれを使い、奈三川に魔法語を教えた。

魔法語勉強

「えー、つまりこの文はなんて書かれているんだ？」

奈三川は首を傾げて白坂に問う。

「『私は治療資格を所持しており、医者を営んでいます』だ。いい加減覚えろ」

「はあ、もう駄目だ」

奈三川は床に寝そべった。

「もう午後八時か。六時間弱勉強して成果無しか。これは結構きついな」

白坂はため息を吐いた。

「問題なんか、旧人類が使ってた『英語』とかでいいのにさ」

奈三川が寝そべった体勢のまま、またも愚痴を漏らす。

「今時、英語何か使っている人なんて居ないだろうし、どのみち英語も出来ないだろお前」

白坂は呆れながらそう言い、伸びをした。二人とも、かなり疲れが溜まっていた。

「あーもう、駄目だ」

奈三川は激しく頭を掻いた。

「そんな事してる暇あるんだったら、単語を一つでも多く覚えろよ」

白坂はプリントに目を通し、奈三川が苦手な部分に赤いマーカーで線を引いていた。

「そもそも、白坂の教え方がおかしいんだよ。しっかり基本から教えてくれよ」

「うるさいな。俺は教師じゃないんだよ」

白坂はプリントを叩いた。白坂は確かに頭は良いが、教えるのはそれ程得意ではなかった。

「治療資格試験の勉強も含めたら、後数日で完璧に覚えるなんて――」

奈三川ははつとして上半身を起こした。

「そうだ、良いことを思いついた」

「どうした。試験会場の魔法磁場でも無効化にする策でも思いついたか？」

白坂は興味無さげにそう発言をした。

「そんな事じゃ無い。勉強しなくても、点数を二割とる方法だよ」

ふーん、と返事をしつつ、白坂は尚も興味無さげにプリントに目を通していた。

「試験つて選択問題だろ？ なら問題が読めなくても、答えが分からなくても適当に答えれば二割はいける。まあ、合格ラインには遠く届かないけどさ」

真面目な顔をしてそんな事を言う奈三川を見て、白坂は思わず溜め息を吐いてしまった。

「よくそんな事ばかり思いつくな」

「仕方がないだろ。これぐらいしかもう策が無いんだ」

奈三川は両手を広げ、語りかけるように白坂に言う。

「残念だけど、それも無理」

白坂がそう首を振ると、奈三川は何でだ、と首を傾げた。

「試験の選択問題は答えて間違った場合、配点分が引かれるんだ」

「どういう意味だ？ 分かりやすく説明してくれ」

奈三川は困惑した表情を白坂に向けた。

「百問ある問題全てに答えて五十問正解していて五十問不正解だった。その場合はゼロ点だ」

「つまり、問題に答えて間違えたらマイナス点になるのか」

確認するように奈三川は復唱した。

「そう。お前みたいな奴が居るからな」

「くそつ、雁字搦めかよ」

奈三川は床を軽く叩いた。鈍い音が部屋に響く。

「雁字搦めじゃない。お前にはまだ『真面目に勉強』という選択肢があるだろう」

白坂は立ち上がり、奈三川の肩に手を置いた。

「それじゃあ、俺はもう帰る」

ドアに向かいながら白坂が言う。

「えっ、もう帰るのか？ もう少して母親とか帰ってくるし、飯とか食べていかないのか？」

奈三川の家は共働きだ。その為、両親はいつも帰りが遅い。

「親に連絡してないんだ。今からしても遅いしさ。悪いけど帰るよ」

「そっか。それじゃあ、また明日な」

奈三川が手を振る。

白坂はゆつくりとドアを開け、手を振りながら部屋から出た。

治療資格試験

玄関のドアの閉まる音が聞こえてから、奈三川は大きなため息を吐いた。

この時点での合格など夢のまた夢。勉強しながら、奈三川は常にそれを痛感していた。

「どうすれば良いんだろうな……」

床に寝転ぶ。資格試験に合格しなければ付き合う事は出来ない。せつかくのチャンスなのに、こんな形で――。

そう考えている時、ある考えが脳裏によぎった。

「そうだ……勘で全部当てればいいんだ」

間違った場合はマイナス点となるが、勘でも間違わなければマイナスになる事は無いのだ。

要は資格試験に合格すれば良いのだ。治療魔法が使えなくても暫くは大丈夫。

もはや錯乱した訳の分からない策だったが、今の奈三川にはそれしか縋るものがなかった。

奈三川は早速準備に取り掛かった。

それから五日間、奈三川は魔法語の勉強を続けた。学校には行っていたが、授業中や休み時間などは殆ど魔法語に関する本を読んだり、珍しく魔法語の授業を真面目に受けていた。

白坂はそれを見て、魔法語だけ勉強しても意味がないのにな、と思っていた。

そして試験の日。奈三川は試験開始時間を確認してから家を出た。地図で調べた限り会場はさほど遠く無く、徒歩でも三十分とからない場所にあった。

奈三川は手提げ鞆から証明書類を取り出した。これが無いと試験に受けられない。一昨日、白坂から教えてもらい、奈三川は急遽受

け付けを済ましたのだ。

街を歩いていると、周りにも自分と同じ場所に向かっていている人が確認出来た。その人たちは、向かいながらも試験勉強に勤しんでいる。

それを見てから奈三川も鞆から魔法語に関する本を取り出し、歩きながら勉強を始めた。

十数分後、奈三川は予定より早く会場に着いた。これから何をすればいいか分からなかった為、奈三川は先ほどの人たちの後を追う事にした。その人たちは証明書を受け付け嬢に渡し、中へと入っている。

すかさず彼奈三川もかしこまった感じの受け付け嬢に証明書を見せ、中へと入る。

試験会場は意外と大きく、詰めれば三百人は入る程だった。彼は後方列の左側の席に腰を降ろした。

まだ試験開始まで時間がある。奈三川は手提げ鞆から魔法語の本を取り出し、最後の試験勉強を始めた。

十数分後。チャイムが鳴り、問題用紙が配られた。奈三川は手提げ鞆をしまい、試験に備えた。

すぐに解答用紙が配られる。奈三川は机の上に置かれている鉛筆を手に取り、それを机の上で何度か転がした。魔法が存在している今でも、旧人類の使っていた鉛筆は使われている。

そして更に数分後、試験がチャイムと共に開始される。試験時間は五十分。合格ラインは百点中、八十五点。

奈三川は問題用紙を広げ、解答用紙をその上に置く。

そして奈三川は魔法語で書かれた問題文を読み、問題用紙の一部に丸を付け、机の上に置いてある鉛筆を転がした。それが奈三川の秘策だ。

ただの神頼み。策とは言えないただの暴挙。だが、これしかもう続けるものはない。

選択問題には、一つ正解とはかけ離れている選択肢がある。

奈三川は以前読んだ本の内容を思いだし、こうすることを選んだ。正解とは大きくかけ離れているであろう選択肢に丸を付けていく。魔法語は何とか読めるようになったが、奈三川には治療魔法についての知識が全くない。その『丸付け』すら運任せ。そして後は数字の書かれた鉛筆を転がし、出た数字を解答用紙に書く。

これで合格できる確率は殆ど皆無だ。だが、奈三川にはそれしか術はなかった。

午前十一時を少し過ぎた頃。白坂は枕元に置いてある携帯電話の着信音で目を覚ました。

目覚め眼を擦りつつ、携帯電話の画面を見る。竹芝からの着信だった。白坂は欠伸をしながら通話ボタン押し、携帯電話を耳に当てた。

「もしもし」

眠たそうな声で白坂は言う。

「あ、ごめん。まだ寝てたかな？」

申し訳なさそうな声で竹芝が謝る。

「いや、もう十一時だし。丁度よかったよ。それで、用件は何だ？」
そう言いつつも、白坂は竹芝が何の用件で電話を掛けてきたかの察しがついていた。今日は治療資格試験の日なのだ。

「あ、うん。奈三川の事なんだけど」

「やっぱりか、と白坂は思った。何気に推測が当たるのは嬉しいことだ。」

「予定だとそろそろ試験が終わるんだ。今から一緒に迎えに行かない？」

「へえ、そうなのか。じゃあ行こうかな」

白坂は被っていた布団を蹴飛ばし、ベッドの上で上半身を起こした。

「じゃあ僕はもう外に居るし、今から白坂の家に行くよ」
分かった、と返事をしてから白坂は電話を切った。

数分後、身支度を終えた白坂は紺色のコートで身を包み、家を出た。数分間家前で待機していると、竹芝がやって来るのが見えた。

「おはよう、白坂」

白坂の存在に気付いた竹芝は小走りしながら手を振っていた。

「おはよう。それじゃあ行こうか」

白坂も手を振り、合流してから試験会場に向かった。

「奈三川、合格したかな」

竹芝が歩きながらそんな事を嬉しそうに言う。

「さあ。まだ誰にも分からないだろ」

白坂は白い息を吐きながら竹芝に言う。

「え、何で？」

「いや、だって。試験結果が出るの一週間後とかだし」

竹芝の疑問に答えた白坂の一言により、竹芝は足を止めた。

「えっ、そうなの？」

「そりゃあそうだろ。一体何人の試験者が居ると思っている。そんなすぐには採点出来ないだろ」

「でも、魔法によって採点するんじゃないかっただけ？」

竹芝が首を傾げる。

「確かに魔法によって採点するが、その後も人の目で確認とかするし。後、証明書とかの事もあるしな」

白坂が竹芝に説明する。魔法も完全ではない。人の目による確認が必要なのだ。

「じゃあ、奈三川はどうするの？ 会うのは明日、明後日とか言ってたよ」

「あーっ、そうだな。奈三川どうするんだろ。間に合わないよな」

白坂がそんな事を言っている内に試験会場に着く。多くの人が顔に微笑みを浮かべて試験会場から出てきていた。

白坂は周りを見渡す。奈三川の姿は確認できない。

「あれ、迎えに行くって連絡したのか？」

その白坂の質問に竹芝は首を振る。

「試験中かも知れないと思ったからしてないよ」

「何だよ。じゃあもう帰ったかも知れないな」

そう言い、白坂は再度周囲を見渡した。奈三川の姿は確認出来ない。

「確かにそうかも知れないけど……」

竹芝は試験会場の出入り口を見た。今なお、試験を終えた人で混雑している。

「取りあえず試験会場に行かない？」

竹芝が試験会場を人差し指で示す。

「いや、行くよりここで待っていた方が……」

白坂は言葉を止めた。奈三川の姿が確認できたからだ。出入口の近くで俯きながら歩いている。

「良かった、まだ居るじゃないか」

白坂はそう言い、竹芝と共に試験会場の出入口に向かった。

距離が縮まった所で奈三川が二人の存在に気付き顔をあげた。

「奈三川。どうだった？」

竹芝が聞くも、奈三川は暫くの間黙ったままだった。だが十数秒後、奈三川は重い口を開いた。

「試験結果が出るの……一週間後だってさ……」

今にも消え入りそうな声で奈三川が呟く。

「どうするんだよ、会うの明日なんだぞ！」

奈三川はいきなり白坂に向かって拳を振り下げた。白坂はそれを後ろに下がって避ける。奈三川は拳を振り下げた勢いで地面に膝をついてしまっていた。

「何だよいきなり。というかお前、試験結果が出るの一週間後だって知らなかったのか？」

「白坂は知っていたのかよ」

奈三川は白坂を睨みつけた。だが白坂はそれを涼しい顔で受け流す。

「だったら言ってくれよ！ これじゃあ付き合えないだろ！」

奈三川が白坂に向かって叫ぶ。よっぽとあの女性と付き合いたんだな、と白坂は思った。

「知らねーよ。自分で調べろよ」

白坂が気の抜けた声で奈三川に言う。

「くそっ、そんな事よりどういう説明をするかを考えないと……」

奈三川は立ち上がったかと思うと体勢を変え、地面に座り込んだ。周囲の人の視線が痛い。

「やっぱり、素直に言うしかないんじゃないかな」

「馬鹿言うな。治療資格無いのがバレたら振られるだろ。嘘も吐いちやったし」

竹芝の提案に奈三川は首を振った。

それから暫く、その場で『彼女にどういう説明をするか』の話し合いを三人でした。

様々な意見を出し合った結果、『治療資格の証明書持つてくるの忘れた』と会った時に言い、何とか結果が出る一週間後まで保たせる、という事になり、その会う時に白坂と竹芝も同席する事になった。

病院

奈三川の彼女に言い訳をする日。白坂は朝、身支度を済ませてから家を出た。

「全く、何で俺まで……」

溜め息を吐きながら、白坂は待ち合わせ場所に向かった。待ち合わせ場所は学校前であり、それから病院に向かう予定だ。

暫く歩を進めると学校の校舎が見えた。階段を上った先にある校舎は随分と大きい。

学校へと続く階段の周囲を見渡す。まだ誰も来てはいなかった。待ち合わせ時刻より早いからだろう。白坂は階段の一段目に腰を降ろし、時間を潰すために携帯電話をいじり始めた。

暫く携帯電話をいじってから右上に表示されているデジタル時計を見る。もうすぐ待ち合わせの時間になる。そろそろだろう、と白坂は顔を上げた。遠くに竹芝らしき人間の姿が見える。白坂は手を挙げ、左右に腕を振った。

その動きに気付いたらしく、竹芝らしき人間は若干早歩きで白坂の方に向かっていった。

「ごめん。待った？」

竹芝が手を振りながら言う。立派な制服姿だった。

「何でデートの待ち合わせみたいになってるんだよ」

白坂はそう言いながら携帯電話をポケットにしまい、立ち上がった。

「あれ、奈三川は？」

周りを見渡してから竹芝が白坂に聞く。

「まだ来てない。……というか、何でお前は学校の制服なんだ？」

白坂は竹芝の服装を見て言う。竹芝は学校の制服を着ており、その上に白っぽいコートを羽織っている。

「何だろ、緊張しちゃって」

竹芝は頭を掻きながら恥ずかしそうに言った。

「何でお前が告白するみたいない感じになってんだよ」

言って、白坂は自分の服装を見た。白坂は長袖、長ズボンの上に紺色のコートを羽織っているだけだった。

「いや、だって何か凄い可愛かったし」

竹芝は特に悪びれることもなくそう言う。竹芝は奈三川と病院に行ったので、奈三川の好きな人とは面識があった。

「まあ、確かに一目惚れするぐらいだもんな。奈三川なら誰にでも告白しそっただけだ」

白坂は言う。小学校時代、奈三川はモテていた。その為よく告白されていたが、六年生の時に三股しているのが女子グループにバレてしまい、それから告白されることは無くなってしまった。今でもそれを引きずっているのか、奈三川は一定周期で女子に告白したりする。しかしその女つたらしという噂を知っている女子がその告白に頷くことは一度もなかった。

「いや、凄い可愛かったよ」

竹芝が身体を揺らしながら言う。随分気分が良いようである。

「まあでも、今回は本気なんだろうな」

白坂は呟く。あんなに真面目に魔法語や治療魔法について学んでいたのだ。相当本気なのだろうということは白坂にも分かった。

「それで……奈三川遅くない？」

竹芝は腕についている時計を見おろして言った。既に待ち合わせ時刻を十分も過ぎている。

「まあ、あいつはいつも時間にルーズだからな」

「彼女に会う日もなのかな？」

竹芝は首を傾げてから周りを見渡す。奈三川らしき姿どころか二人以外誰も居ない。

「集合時間か場所を間違えたか、先に行ったか」

又は、と白坂は続ける。

「恐くて逃げ出した、とかもあるな」

白坂は言う。告白した女性に『実は治療資格なんて無いんです』と再度告白しに行くのだ。誰だって恐がるだろう。どうなるか分からないのだから。

「確かにそういう場合もあるかも……」

竹芝はうーん、と唸りだした。

「まあ、もう少し待ってみようか」

白坂はそう言い、学校へと続く階段に腰を降ろした。

竹芝は階段の近くに立ちながら腕時計を見た。あれから二十分が立っているが、奈三川は一向に来ない。

「全くあいつ、会う直前に臆病風にでも吹かれたのか」

竹芝の腕時計を確認する動作を見てから、白坂はポケットから携帯電話を取り出した。

メモリから『奈三川』と書かれた欄をクリックし、携帯電話を耳に当てた。

すぐに電話が繋がる。

「もしもし、奈三川か？」

「何だ白坂か。どうしたんだ急に」

白坂は奈三川のその発言を聞いて、この野郎と思ってしまった。

「急につて、もう待ち合わせ時刻から数十分立ってんだぞ。今ここに居るんだ？」

「今か？ 今は白坂の後ろにー」

「よーし殴っちゃうぞ」

白坂は言ってから片手で素振りを始めた。何かと竹芝がそれを見ている。

「何だよ、あまり怒るなよ。もう白坂たちの近くにいるからさ」

そう言われて白坂は周りを見渡した。視界の片隅に奈三川らしき人間の姿が見えた。

白坂は通話を切ってから携帯電話をポケットにしまい、手を振った。

「いや、ごめんごめん。遅れちゃったよ」

新品同様の黒いスーツに身を包んだ奈三川が謝りながら走ってきた。

その姿を見て、白坂は軽く舌打ちをする。

「お前もそういう服装なのか」

竹芝は制服で奈三川はスーツ。白坂だけ私服。自分が雰囲気悪くしているんじゃないかという感じがしてしまう。

「おう。これから彼女に会いに行くんだから当然だ」

奈三川が仁王立ちをする。

「いや、だからってスーツじゃなくても良いだろ。逆にひかれないか？」

足元とかには土やら砂が付いてるし、と白坂が言う。

というより、何で女性に会いに行くとなると服装を変えるんだろうこの二人は、と白坂は思った。

「これはファッションだ。素人には分かるまい」

足元に目をやり、調子に乗った風に言う。

「いや、素人に分からなかったらそれはファッションじゃ無いだろ」

白坂は首を振る。

「さあ、行こうぜ」

足元に付着した土や砂を手で払ってから奈三川は歩きだした。

恥ずかしかったんだな、と白坂は思いながら歩き出す。竹芝もそれに続いた。

三。五号室

暫く歩いてから、白坂は口を開いた。

「そういえば奈三川の好きな人の名前って何なんだ？」

「それは見てからのお楽しみだ」

白坂の前を歩いていた奈三川は振り向かずと言った。

「何だよ、勿体ぶるなよ」

そう言いながら白坂は後ろを歩いている竹芝の方を見た。竹芝は白坂の視線に気が付くと、首を左右に振った。

「良いだろ、これから会ったから」

奈三川は病院とは違う方向に向かった。

「どうしたの？」

そんな奈三川の行動を見て、竹芝は首を傾げた。

「いやあ、果物ぐらい買っていった方が良いと思ってさ。この先に店があるんだ。白坂達は先に行つててくれよ」

「そんな事言われたって、俺は病院の場所知らないんだけど」

白坂がそう言つと、竹芝が後ろから肩をつつき、僕が分かる。と言った。

「ああ、そつか。竹芝も一緒に行つたんだったな。それじゃあ先に行くが、逃げるなよ」

「逃げるわけが無い。それより、先に彼女に会つたりするなよ」

奈三川は手を振りながら去つていった。

「彼女の事知らないのに会える訳がないだろ」

奈三川の後姿にそう言つてから、白坂は竹芝に着いていった。

竹芝の案内で病院に辿り着く。白坂の目の前にある総合病院はまだ新しい。外装は綺麗であり、白く輝いていた。

病院の中に入る。二人は待合い所に座り、奈三川が来るのを待った。休日だからかは分からないが、結構人は少なかった。

病院は広く、薬品の臭いなど全くしない。魔法による治療を行っ

ている病院だからだ。今ではこれが主流である。

広い待合所の片隅に、子供でも楽しめる娯楽場があった。

奈三川がまだ来ていない。時間を潰すため、二人はその娯楽場に向かった。

白坂が本棚を眺める。特にこれと言って面白そうな本はない。

幼児用の娯楽場だし当たり前か——そう思つて白坂が本棚から目を離れた時、横で本を読んでいる竹芝の姿が目に入った。おもちゃを貰った時の子供のような透き通った目でその本を読んでいる。表紙には『世界を救った英雄』と書かれていた。

世界を救った英雄と言えば『ベスウエル』しかない。

ベスウエルは数十年前、世界を滅ぼそうとした未確認の敵——俗に言う『魔物』から一人で世界を救った。

ベスウエルの素性を知っている者は誰も居ない。無論、親族なども確認されていない。

だがベスウエルが魔物を倒すときに幻想魔法を使ったという資料がある為、人間では無いのではないか、などの意見がある。

しかしその『ベスウエル』は数年前、突然行方不明となつてしまつた。

行方不明になつたのが旧人類狩りの直後だった為、旧人類狩りにかつての英雄ベスウエルが起こしたのではないか、などの噂が流れている。無論、真実を知っている者は誰も居ない。

——懐かしいな。

ベスウエルの事を思い出し、白坂は心の中でそう呟いた。懐かしいと言えば語弊があるのだろうが、多くの男子にとって世界を救った英雄は憧れの存在だった。まるで創作の世界のような事を現実にやってのけたのだから、幼い子供は誰もがベスウエルのようになりたいと思つていた。白坂もその一人だった。なりたいと思つて魔法を学んだりもしたが、それは昔の話。今はもうそんな事は考えてい

ない。どう頑張ったってベスウエルのような魔法使いにはなれないし、なる必要もない。いつまでも幻想を見ている訳にはいかない。だからだろう。大抵の子供は小学校中学年ぐらいでその憧れを捨ててしまうのだ。

欠伸をしてから娯楽場から離れ、待合い所の椅子に腰を降ろす。

竹芝はまだその本を読んでいた。

既に病院に着いてから十数分が経っている。竹芝は様々な本を読みながら時間を潰していた。

今、奈三川がどこに居るのか知りたい。白坂は通話をしようと椅子から腰を上げた。

「奈三川に電話してくる。少し外に出るな」

変わらず娯楽場で本を読んでいる竹芝に白坂が言う。竹芝はうんと本から目を離さずに頷いた。

白坂は外へと通じる大きなドアを開け、ポケットから携帯電話を取り出した。

メモリから『奈三川』と書かれた欄を選択し、電話を掛ける。

携帯電話を耳に当てた直後、電話が繋がった。

「もしもし、奈三川か？」

「白坂か。どうしたんだ？」

素っ頓狂な口調で奈三川が言う。

「今どこに居るんだ？ もう結構待っているんだが」

「今は果物を買って病院に向かっているところ。もう少しで着くと思う」

「そうか。じゃあ待つてるから、早く来いよ」

そう言って通話を切り、携帯電話をポケットにしまった。

数分後、奈三川が横幅が三十センチメートルはある大きな籠を抱えてやってくる。果物が飛び出しているのが見える。

「随分でかいな。どれだけ後ろめたいんだよ」

白坂がその果物籠を見てそう呟いた。今日は奈三川の好きな人に言い訳をしにくい日なのだ。

「うるさいな。これは俺の気持ちなんだ」

「後ろめたいんだろ」

そんな事を言い合いながら病院に入る。

「よし、じゃあ行こうか」

奈三川は大きな籠を白坂に託し、受付に向かった。竹芝も本を本棚に戻し、二人に着いていく。

奈三川と受付の女性は二言位話をし、奈三川は左にある階段に向かった。そして三階まで上がった後奈三川は踊り場で方向転換をし、長く広い廊下を歩き始めた。

「この階に彼女が居るのか？」

白坂が奈三川に問う。奈三川はそうだ、と頷いた。

それから少し歩いた時、突然奈三川が奇声を発し、両手で腹を押さえ始めた。

「どうしたお前。急にそんな声だして」

果物が入った籠越しに白坂が奈三川に言った。

「ふ、腹痛が……。すまん、すぐに戻るから先に行つてくれ」

その奈三川の様子を見て、白坂は呆れた顔をする。

「何だそれ。演技なのか？」

「いや本当だ本当。彼女は三〇五号室に居るから」

そう言つて奈三川はこの階にある便所に向かった。

「それで、どうしろつてんだ？」

白坂は困つたように頭を掻いた。この二人で彼女に会いに行つても意味が無いのだ。

「取り敢えず行かない？ 待つてても仕方がないよ」

竹芝がそう提案する。

「まあ……そうだな。行くか」

実際、白坂の奈三川が告白した女性に興味があつた。意見が一致し、二人は三〇五号室に向かった。

数秒後、目的の場所に着いた。未だに奈三川は戻つて来ない。暫く号室の前で待つていたが現れる気配が無かつたので、渋々号室の

ドアを開ける事にした。

「……どっちが開ける？」

ドアの前で竹芝が白坂に問う。ドアを開けた者が必然的に前になり彼女の目に最初に入るから聞いたのだろう、と白坂は察した。

「どうせお前は開けないつもりだろ」

そう言っ て白坂は果物籠を竹芝に渡し、病室のドアを開けた。

彼女 雪野沙希

ドアを開けた直後、甘い香水の匂いがやさしく鼻腔を刺激する。病室では一つの小さなベッドの上に、黒長髪の女性が座って窓の外を見ていた。ここからでは顔全体は確認出来ないが、後ろ姿だけでも相当綺麗だろう事は分かる。

彼女が、奈三川の？ 二人は互いに顔を見やった。これ程美しい女性が、奈三川と付き合うのか？ というのが二人の本音だった。それから、人形の世界の様な時間が流れた。誰も動けず、誰も話せない。ただ、その場に存在している——そんな時間。

しかし彼女がこちらの存在に気付いたのか不意に振り返り、二人の顔を交互に見た。二人も彼女の顔を見る。後ろ姿から想像したのを良い意味で裏切る程に美しかった。

海のように透け通った綺麗な瞳。綺麗な真白の肌。川の穏やかな流れを彷彿とさせる黒長髪。細く守ってあげたくなるような華奢な体つき。女性なら誰もが欲しがるといふようなスタイルだろう。

「誰……、ですか？」

少し怯えた、高く美しい声。これが美声なのか、と白坂は改めて思った。

「あ、いえ、別に悪い人ってわけでは……」

竹芝は困った様に苦笑を浮かべ、手を左右に振った。

「ああ、俺たちは奈三川の友人だよ。奈三川の事は……知ってるよね？」

白坂は竹芝に救済の手を差し伸べた。竹芝は助かった、というように胸を撫で下ろす。

「あら、奈三川さんの？」

女性は小首を傾げ、この人たちが奈三川さんの友人なんだ、という様に再度、二人の姿を見た。

「それで、あの……奈三川さんは？」

「え、ああ。そういえば……。ゴメン、ちょっと捜してくる」

白坂はそう言って後ろ手でドアノブに手を掛けた。

「捜すって、一人で？ 待って、僕も……」

病室から抜け出そうとする白坂の腕を、竹芝が掴んだ。

「いや、お前はここにいろ。捜すのは俺だけで充分だ」

白坂は竹芝の事を突き返し、病室から飛び出した。病室から色々と騒がしい声が聞こえてきたが、白坂はそれを無視して長く広い廊下を歩いた。

「はあ……」

思わず溜め息が漏れる。まさか奈三川が告白した女性がこんなに綺麗だとは思っていなかった。竹芝たちがあれだけ気分上々だった理由も今なら分かる。

「つたく、それなのに何で逃げるかな……」

白坂は頭を激しく掻きながら奈三川を探す。さつき腹痛を訴えていたから恐らくは便所に居るのだろう。白坂はこの階にある便所に向かった。

「お、白坂か。どうしたんだ？」

便所に着いたのと同時に、中から奈三川が出てきた。

「どうしたんだ、じゃないだろ。逃げるなよ」

白坂は奈三川に言った。

「逃げてないって。それより、会ったのか？」

「会ったよ」

奈三川の疑問に白坂は即答した。

「どうだ、可愛かっただろ？」

「ああ。ム力つく程にな。全く、何でお前みたいな奴の告白に頷いたんだか」

白坂は奈三川の腕を掴み、三〇五号室に向かった。

「痛い痛い。あまり強く引つ張るなよ」

「そんなに強く引つ張ってないだろ」

あまり距離は離れていない。数十秒後、二人は三〇五号室のドア

前に着いた。

「早く会って事情を話せよな」

白坂はドアの前で言う。ドアノブは奈三川が握っている。

「全く、気が重い。嘘なんて吐くんじゃなかった」

溜め息混じりに言うてから奈三川はドアを開けた。後悔先に立たずだな、と白坂は思った。

中は静まりかえっていた。女性は窓の外を見ており、竹芝は壁に寄り掛かっていた。果物籠は近くの棚に置いてある。

「あら、奈三川さん」

しかし先ほどとは違い、女性はドアを開けてすぐに白坂たちの方を見た。

「あ、ああ。元気だった？」

手を軽く挙げて奈三川が言う。動揺しているのが声だけでも感じられる。

「はい、元気です。それであの、資格証の事なんですが……」

ああ、と頷いてから奈三川はポケットに手をつまむ。そして数秒してからポケットから手を取り出し、慌てたように自分の服をパンパンと叩き始めた。資格証を忘れてしまったという演技なのだろうが、下手だな、とその演技を見ながら白坂は思った。

「あ、ごめん。資格証、忘れちゃったみたい……。また来週で良いかな？」

奈三川は女性に頭を下げる。

「何で……」

女性は首を傾げる。その言葉に反応して奈三川は顔を上げた。

「何で、嘘を付くんですか？」

「嘘？ 何の……」

奈三川が言い終わる前に女性は言う。

「さつき、竹芝さんに聞きました。本当は資格なんて持っていないって」

「なっ……」

目を見開き驚きの声を上げた直後、奈三川は憤怒の形相に変え、竹芝の襟首を掴んだ。

「何してくれてんだよ！ お前のせいで……」

それを見ていられず、白坂は止めにかかった。

「落ち着けよ奈三川！」

掴んでいる手を離そうとするが、簡単には離れない。

「止めて下さい！」

女性が俯きながら奈三川に向かって叫ぶ。

「いや、でも……」

そう言いつつも、奈三川は手を離れた。竹芝が激しく咳き込む。

「あの、奈三川さんと二人っきりで話がしたいので……」

「あ、ああ」

女性の言いたい事を察し、白坂は病室のドアを開け、外に出た。

竹芝もそれに続く。

「これから奈三川、どうなるんだろ」

喉を押さえながら竹芝が言う。

「さあ。後はあの二人次第だろ」

白坂が壁に寄り掛かりながら言う。

「僕、余計な事しちゃったかな？」

竹芝のその疑問に、白坂は首を振った。

「それは無いだろ。どうせすぐにバレる事だろうし」

白坂がそう言うと、竹芝はそうなのかなあと呟き、黙り込んだ。

暫くして奈三川が病室から出てくる。ドアを開けた時、奈三川の形相は笑顔に変わっていた。

結局、女性は「資格なんていつでも取れるから」と言い、奈三川の嘘を許した。

それを聞いてそれ程にまでその女性は奈三川の事を信じているんだな、と白坂は思った。

「それで、結局奈三川の彼女の名前は何なんだ？」

病院から出て帰路についた時、白坂は奈三川に聞いた。

「雪野沙希^{ゆきのさき}だよ。可愛い名前だろ？」

奈三川は嬉しそうに言った。

そして一週間後、試験結果が届いた。奈三川は見事、合格していた。

無論、奈三川は適当に答えて合格しただけだから、まだそんな治療魔法なんてものは使えない。でも、それもこれから使えるようになれば良いだけだ。

こうして、奈三川は笑顔で彼女に会いに行ける事になった。

修学旅行

「あー、気が重いな……」

十二月中旬の放課後。奈三川が机に顔を伏せながら呟く。

「どうした奈三川。最近はずっと彼女出来たーって事で元気だったのに」

白坂が肩に鞆を掛けながら言う。今日は修学旅行の前日という事で午前授業だった。なので今はまだ正午前である。

「いやー実はさ。今日彼女の両親に挨拶する事になっちゃたんだよ」
奈三川が顔を上げて白坂に言う。

「へえ。結婚でもするのか？」

「いや、そうじゃなくてさ。彼女が両親に俺のこと話しちゃって、それで今度話でもしようかーって事になって。それでさ、白坂に竹芝。ちよつと頼みが――」

白坂は奈三川が言い終わる前に首を振った。

「また同席してくれ、とかだろ？」

白坂の発言に凶星、という様な顔をする奈三川。

「明日は修学旅行で、これから準備をしなきゃいけないんだ。竹芝だつてそうだろ？」

近くに居る竹芝に白坂が話し掛ける。竹芝はうん、と頷いた。

「それに、俺たちが行つたつて意味無いだろ」

そう言つて白坂と竹芝は教室の出入り口であるドアに向かった。

「まあ頑張れ。修学旅行の準備も忘れるなよ」

手を振りながら二人は教室から出て行つた。

「全く、両親となんて気まずいよな……」

溜め息混じりに呟いてから、奈三川は鞆に教科書を詰め込み、帰る準備をした。

「それにしても修学旅行、何でこんな時期にやるんだろつな。今は十二月なのに」

廊下を歩き、階段を下りながら白坂が竹芝に言う。

「雪山に近い所に行くみたいだからね」

竹芝が答える。明日の修学旅行では雪山に近いところに行くのだ。

「雪山かー。行った事無いな。やっぱり寒いんだろうな」

白坂が言いながら紺色のコートのポケットに手を入れる。今でもこんなに寒いのに。雪山は一体どれくらい寒いだろうか、と白坂は考えてしまっていた。

「雪山に登るわけじゃないけど、寒いのは確かなんじゃないかな」

下駄箱で靴を履き替えながら、竹芝が言う。

「そうだよなー。やっぱり服は気を付けないといけないな」

靴を履き替え終えた白坂が校舎から出てから言う。

「そうだね。それじゃあ、僕はこっちだから」

竹芝は校舎から出るとそう言いながら手を振り、西側の門に向かっていった。

「ああ、それじゃあ」

白坂も手を振り、東側にある校舎に向かった。

修学旅行当日、白坂はいつもより少し早く家を出て学校に向かった。

いつものバッグとはまた別な大型のバッグを肩に掛けている。

歩きながら白坂はしおりを眺めていた。そこには必要な持ち物、日にち別の予定が書かれている。

先ずはバスに乗って目的地——雪山近くの観光名所へと向かう。

そこで暫くの自由時間があり、その後は宿泊先の旅館に行き夕食を食べて自由時間。それが今日の予定だった。

——楽で良いな。

そう考えながら白坂は肩に掛けていた大きいバッグにしおりをしまい、学校へと向かい続けた。

数分後、学校に着く。学校へと続く階段の前に数台のバスが止まっている。

「よお、白坂。随分重そうだな」

緑色の長袖を着た奈三川が荷物を何も持たず、手を振りながらバスの近くからやってくる。

「寒いと思つてさ。結構服とか持つてきたんだよ」

そう言つて自分の乗るバスに向かい、荷物置き場に大きなバッグを置いてからバスに乗った。

白坂は事前にクジで決めた席に腰を降ろす。一番後ろの席で、人数が奇数な為隣には誰も居ない。

退屈だな、と思いながら白坂は身体を椅子の背もたれに任せ、窓の外を眺めていた。

暫くし、バスガイドの声と共にバスがゆっくりと動きだす。

バスガイドは目的地に関する情報を詳しく話していた。だが、見た感じそれを真面目に聞いている生徒は少ない。白坂も聞く気が無かったので、窓に寄り掛かりながら眼を閉じ、寝ることにした。

バスに揺られながら、白坂は眼を覚ました。どうやら、駐車場に着いたらしい。窓の外には車が規則的に並んでいる。

白坂は目覚め眼を擦り、車内を見渡した。付近の生徒は疲れたのが眠っていた。さすがに車で数時間は堪えるのだろう。それから暫くし、バスはある位置で止まった。バスガイドの声で皆は眼を覚まし、バスからゆっくりと降りていく。

外は雪山近くとあってか寒い。白坂は鞆に入れていた上着を取り出し、それを着てから集合場所に向かった。これから班ごとに観光名所を周るのだ。

観光名所を周り終え、バスに戻る。

「いやーなかなか良い場所でしたね。思い出に残ります」

バスに乗りながら白坂の前に居る奈三川がバスガイドの女性に向かって言う。バスガイドの女性は優しく微笑みながら頭を下げた。

「嘘つけ。お前買い食いしてただけだろ」

白坂は奈三川と同じ班で共に行動していたが、観光名所には目もくれず食べ物食べているだけだった。なので白坂はバスガイドの女性に聞こえるようにそう言った。

「うるせえ。変な事は言うんじゃないよ！」

奈三川が小さな声で白坂に言う。

「お前が変な事言ってるからだろ」

そう言いながら白坂は後ろに向かい、先ほども座っていた椅子に腰を降ろした。

そうして、白坂は伸びをしてから再び眼を閉じ、眠る事にした。

何時間が経っただろう。白坂はバスガイドの声で眼を覚ました。時計を見ると、あれから数十分が経っていた。バスを降りる。目の前には宿泊先である旅館があった。空はもう暗い。

白坂は大きく深呼吸をしてから、集会場に向かった。大きな荷物は係員が運んでくれる。

集会場ではこれといって面白い話もなく、ホテルの係員が注意事項を告げたり、校長の長い話があっただけだった。式が終わり、集会場から旅館に移動しようとした時、後ろから竹芝が話掛けてきた。「ご飯食べ終わったら何する？」

「どうするって……。夕食の後は自由時間だろ？ のんびり過ごすけど」

「それならさ、食べた後すぐに温泉に行かない？ 前に調べたけど、結構大きいらしいよ。魔法を使つてない温泉とか」

最近では、殆どの温泉が魔法を使つて沸いている。魔法の為、様々な健康に良い効果がある。その状況下で、敢えて魔法を使わないというのは経営者のプライドがあるからなのだろう。

「まあ、どうせ入るんだし……行ってみるか」

白坂はそう言った。

温泉

夕食を食べ終え、事前に決められた部屋に向かう。夕食は普通ではあまり食べられないような豪華な料理ばかりが出てきた。

部屋は竹芝や奈三川たちと同じだ。といっても人数があまり多くないから当然である。

五。七号室、と書かれた部屋に着き、白坂はドアを開ける。室内は意外と広く、一人二畳ぐらいのスペース配分だった。部屋の隅にはテレビや小型の冷蔵庫なんかも置かれていた。

「あれ、まだ誰も居ないんだ」

竹芝が室内を見回して言う。

「まあ随分早くに来たからな。どうせすぐに来るだろう」

白坂はそう言いながら荷物の置かれた場所に行き、入浴道具を取り出した。

「いやー、まさかあんなに美味しい料理がこの世に存在していたとは思わなかった」

部屋のドアを開けながら奈三川が言う。同じ部屋に泊まる他の生徒と話しているのだ。

「何だ白坂たち、これから風呂に行くのか？」

部屋に入り地面に腰を降ろすなり奈三川が白坂たちの行動を見てそんな事を言う。

「ああ。どうせ暇だしさ」

白坂は竹芝に行くぞ、と言ってから部屋のドアノブに手を掛けた。「そついや、食堂で女子がこれから温泉に行こうかーとか言ってたよな」

男子生徒の一人が思い出したかのようにそう呟く。

「何………？」

その言葉を聞き、奈三川は眉根を寄せた。

「それは本当か？」

奈三川はその男子生徒に詰め寄る。

「え、ああ。確かに言ってたぞ」

男子生徒が困惑した表情を浮かべながらそう言う。

「なるほど……」

奈三川は顎に手をやり、思案を始めた。

「よし、俺たちも風呂に行くぞ」

「おいこら覗き魔野郎」

荷物置き場に向かい入浴道具を取り出している奈三川に向かって白坂は言う。

「人聞きが悪いな白坂。食堂でそんな事を言ってるという事は覗きに来てほしいと言ってるようなもんだよ。分かったか」

見れば他の男子生徒も入浴道具を荷物から取り出している。覗く気満々である。

「よし行くぞ野郎ども！」

奈三川は数人の男子生徒を引き連れ、温泉に向かって行ってしまった。気付けば室内には白坂と竹芝しか居ない。

「……どうする？」

竹芝が白坂に問う。奈三川たちの異様なまでの気合いの入りに動揺しているのだろう。

「どうするも何も……まあ取り敢えず行こうぜ」

白坂は竹芝に言って部屋を出た。竹芝も後に続く。

この部屋は五階にあり、入浴施設は四階にある。女子の部屋が三階にあるのは階段や廊下などでの異性との交流をなるべく減らす為の配慮らしい。そんな事をして四階ではすれ違ってしまふけれど、歩いていく内に何人かの男子生徒とすれ違ったが、入浴用具を持っている生徒は居なかった。

四階に着き、二人は入浴施設に入っていく。周囲に女子生徒は居なかった。

着替えの場所は大きく、着替えを入れる箱が数十個置いてある。二人は脱いだ服を箱いれ、腰にタオルを巻いてからガラス戸を開け、

浴場に入った。周りは石垣で囲まれており、女子浴場との境目にも石垣がある。浴場の真ん中には大きな円状の風呂があった。

「ふむ……これが俺たちの野望を阻止する最後の壁か」

声が聞こえる。見ると、女子風呂との境目である石垣の前で数人の男子生徒が顎に手をやり思案顔を浮かべていた。今のは奈三川の声である。

「くそつ、こんなもので妨げられるとは……透視魔法があればな」
「使えても使えないだろ」

奈三川の独り言に白坂が遠くから意見する。透視魔法というのは幻想魔法でなくこの世に存在する。だがそんな魔法は犯罪の臭いしかしい。その為この世に存在する物には透視魔法使えないようにする物質が含まれている。それは家であれ家具であれ服であれ。その石垣も例外ではない。

「何だ白坂、来ていたのか。どうだ、楽園を見に行くかい？」

白坂の存在に気付いた奈三川が振り返りながら言う。

「女子風呂を楽園と言うなよ覗き魔が」

白坂は覗き見なんて興味無い、とでも言うように周りに設置されているシャワーに向かう。竹芝もそれに続く。

「あそこは楽園だよ。間違いなくな」

奈三川が石垣の頂点を見上げる。壁と頂点の間には数十センチの隙間がある。人一人なら通り抜けられそうだが。

「本当に覗くの？」

シャワーの前にある椅子に腰を降ろしてから竹芝が言う。

「当たり前さ。人は常に楽園を追い求める生き物なのさ」

なんて、かつこ悪い台詞をかつこ良く言ってから。奈三川は石垣の石に足を乗せた。

「俺たちはこれから『楽園の隙間』に向かう。野郎ども、良いな？」

奈三川が近くにいる男子生徒に問う。男子生徒たちはおおー！と叫びながら返事した。

確実にいつもの奈三川じゃないな、と白坂は体を洗いながら思っ

た。

奈三川たちは石垣をゆつくりと危なげなく登っていく。体を洗い終えた白坂と竹芝は湯船に浸かりそれを眺めていた。

「彼女居るのによくあんな事出来るよな」

白坂がそう呟いた直後、浴場のドアが勢いよく開いた。

「お前らちゃんと肩まで浸かってるか？ 見回りに来たぞー」

見ると、そこには体育の教科を担当している教師が立っていた。服は着ている。

「あ、先生。ロククライミングしてる生徒が居ますよ」

そう言いながら白坂は石垣を登る奈三川を人差し指で示した。

楽園はもうすぐそこにある。

奈三川は楽園の隙間と名付けた石垣の頂点と天井の間にある隙間に辿り着いていた。

「行くぞ……」

小さく呟き、奈三川は『楽園』を覗く。だが、果たして。そこに楽園などなかった。

「馬鹿な、女子が居ないだど？」

女子浴場に女子は一人も居なかった。どうして。まさかもう出てしまったのか。それとも最初から――。

そう奈三川が思案していた時。背後から声が聞こえた。

「おーい、もうバレてんぞー。いいから早く降りてこーい」

浴場には体育の授業を担当している教師と服を着た女子数人が立っていた。

「嘘だろ……」

その地獄とも言える惨状となった浴場を見て、奈三川は思わずそう呟いてしまっていた。

魔法の無くなる日

入浴を終え、竹芝と共に自由時間を色々な部屋を行ったり来たりして過ごした後。就寝時間になって部屋に戻ってきた白坂は部屋の異変に気付いた。部屋には親しい男子生徒が一人居るだけだった。

「あれ、奈三川たちは？ もう就寝時間だよな。まだ怒られてるのか？」

部屋を見渡しながら白坂は部屋の入り口の近くに居る男子生徒に話し掛ける。その男子生徒は布団の上で寝転んでいた。奈三川たちが石垣をロククライミングして女子風呂を覗こうとした事は既に大半の生徒が知っている。そういう噂は流れるのは早いのだ。

「いや、もう怒られてないみたいだけど、罰として今日は先生たちの部屋で寝ることになったみたいだぞ。奈三川たちもよくあんな馬鹿な事するよな」

「ああ……」

白坂は同情の意を込めてそう呟いた。せつかくの修学旅行で教師と一緒に寝るのは拷問に等しい。

「白坂と竹芝はこれからどうすんの？ 俺はもう疲れたから寝ようと思ってるけど」

男子生徒はそう言いながら布団を被る。夜は起きるのか、という問いだ。

「あー、俺もそうしようかな。今日は色々歩き疲れたし」

白坂はそう言いながら竹芝を見る。

「竹芝はどうすんだ？」

「んー、僕も今日は寝ようかな。まあ夜は明日もあるしね」

白坂が問うと竹芝はそう答えた。特に残念がっている様子はない。「そっか。じゃあ皆おやすみ」

そう言って白坂は電気を消した。歯磨きなどは既に済ませてある。白坂は寝転がり、布団を被ってから眠りについた。

朝、白坂は寒さで目を覚ました。上半身を起こそうとした時、自分の荷物をいじっている竹芝の姿が見えた。

「な——」

何やってんだよ、と言い掛けて白坂は口を閉じる。ふと見えた横顔。その表情が険しかったからだ。

幸い、聞かれてないらしい。そう判断した白坂はゆっくりと上半身を寝かせ、目を瞑った。耳は澄ましたままだ。

暫くし、竹芝が白坂の横を通り過ぎ、部屋から出て行く。音でそれを確認してから、白坂は上半身を素早く起こす。

「なあ。竹芝の奴、どこ行っただ？ まだ部屋で待機する時間だよな」

寝ていた筈の男子生徒が白坂に問う。物音か何かで起きたのだろう。

「ああ。トイレも部屋にあるし……どうしたんだろな」

白坂は枕元に置いてある時計を見る。まだ午前四時過ぎだった。

「どうしたんだろうな。ちょっと見てくるか」

そう言って白坂は布団から出て部屋のドアノブに手を掛ける。

「えっ、行くのか？ 危なくないか？ 先生に見付かったら、最悪今夜は先生たちと寝ることになるぞ」

通常、この時間帯は外に出てはいけない。奈三川たちの一件があったからだろう、男子生徒は白坂にそう言った。しかし、竹芝が出て行っている時点で既に危うい。

「俺は室長だ。ルール違反者は取り締まらなくてはいけない。——そういう雰囲気であれば問題ないだろ。大丈夫、見付かるようなミスはしないさ」

そう言って白坂は部屋のドアを静かに開け、外に出た。なるべく足音をたてないように歩を進める。教師が泊まる部屋の前では特にそれを気を付けた。

暫く歩き、四階の階段前。そこに竹芝の姿があった。

何だあいつ、女子の部屋にでも行く気が……？

そんな白坂の考えを裏切り、竹芝は三階の階段を下り、二階へと向かっていく。

ここで声を掛けるのは不味いな。声を掛けるなら階段か――。

そう考えて階段を下りようとした時、背後から音が聞こえた。振り向くと、視界の片隅に女子生徒の姿があつた。欠伸をしながら白坂の居る場所に向かつてくる。

大丈夫だ、まだ自分の存在には気付いてない。

そう自分に言い聞かせ、姿勢を低くし、階段を静かに下りる。存在に気付かれるのは不味いが、かと言って音をたてながら素早く階段を下りるのも不味い。それは数秒の間で白坂が考え付いた最良の策だった。

階段の踊り場に着き、女子生徒が近くにあるトイレに入ったのを音で確認すると、白坂はほっと胸を撫で下ろした。

だけれど、竹芝との距離は大分離れてしまった。急がないといけない、と白坂は静かに、だけれど素早く階段を下りていった。

結局竹芝は一階まで下り、そこからまた旅館の玄関に向かつていった。竹芝との距離はかなり離れている。ここで叫んで呼び止める事は出来ない。見付かる確率がほぼ百だからだ。呼び止めるなら外に出てからだろう。そう考えた白坂は静かに竹芝の後を追った。

案の定、竹芝は旅館の外に出て行く。白坂も玄関で服を履き替え、外に出る。

外には微かに白い霧が出ていた。目を細め、前を見る。おぼろげに竹芝の姿が見えた。

「おい、竹芝――！」

外という事もあり、もう思い存分叫ぶ事が出来る。白坂は竹芝に向かつて叫んだ。

だが、返事がない。それどころか反応がない。気付いていないのだ。

「おい、竹芝――！ 聞こえてんのか――？」

再度、先ほどより大きな声でそう叫ぶ。今度も全く反応がない。

「くそっ、直接言うしかないか……」

そう悪態をつくくと、白坂はやや早歩きで竹芝に近付く。全く、何か考え事でもしているんだろうか。そういえば、手には大きな黄色い袋が握られている。

そんな事を、歩きながら白坂は考えていた。

『飛行場』と書かれた看板が見える。結局まだ追いつけていない。何気に竹芝は歩くのが速い。走るという選択肢もあったが、霧が出ていた為、そんな思いきった事は出来なかった。

——ここが竹芝の目的地なのだろうか。

その看板を見て、そんな事を思う。竹芝の様子を察するに、恐らくはそうなのだろう。

竹芝は飛行場に入り、古く小型の飛行機に乗り込む。竹芝を呼び止める為、白坂もその飛行機に乗り込む。

乗った直後、白坂の背後にある入り口が音をたてて閉まる。

「竹芝ー、居るのか？」

何でこんな所に居るんだと疑問に思いながら、目の前にある扉を開けようとドアノブに手を掛ける。

だがその時、急に飛行機が大きく揺れ、白坂はバランスを崩し腰を壁にぶつけてしまう。

「いつ……」

腰を擦りながら壁に寄り掛かり、立ち上がろうとした時。先ほど開けようとした扉が開いた。

「白坂……」

扉の向こうには竹芝が居た。

「竹芝か。一体どうしたんだ？　こんな所に来て空の旅でも始めるつもりか——」

そんな冗談を言って白坂が竹芝に向かって足を踏み出そうとした時。竹芝は驚きの表情を浮かべながら懷から何やら黒く光る何かを取り出し、それを白坂に向けた。

「まさかこんな所に来るなんて……」

向けていたもの。それは銃だった。黒の、自動拳銃。

「なっ……」

白坂は目を大きく見開いた。

「何やってんだよ、お前……」

さすがにもう冗談なんて言っていられない。圧倒的銃の存在感に、白坂は気後れしてしまった。

「計画の為なんだ。許してくれ」

竹芝は引き金に指を掛け、白坂に向かって発砲した。銃弾は近くの壁に当たり、跳弾した。

「おいおい、何やってんだ。冗談だろ？」

白坂の脳が目の前の現象を否定する。脳がその事実を受け入れないのだ。

「冗談なんかじゃ無いさ。これを見る」

竹芝は先ほど自分が開けた扉の向こうを人差し指で示す。そこには、大きな黄色の袋があった。先ほど竹芝が手に持っていた袋だ。

「魔法を無力化にする魔法の完成系である粉だ。これを使えば全世界の魔法が無力化される」

竹芝は微笑みながら言う。いつもとは口調が全然違う。ひょっとしたら別人なのではないか、という非現実な想像が白坂の頭によぎるが、白坂は頭を振ってそれを否定した。

「馬鹿な……それは幻想魔法の筈だ！ 使えるはずがない」

白坂は竹芝の発言を否定する。その魔法は幻想魔法。使えるわけがないのだ。だから規制されていない。

「やっぱり新人類も愚かだ。何も知らないのに、思い込みだけで決め付けている。君らが馬鹿にしている旧人類と何も変わっていない。それなのに……新人類は旧人類を蔑み、滅ぼした」

竹芝は自虐気味にそう呟く。

「魔法を無力化にする魔法は使えないと言っているが、それは間違いだ。この魔法を無力化にする魔法は正確には魔法じゃなくて粉だ。

魔法磁場と似た感じだ。魔法を否定したところで、その粉は消えたりしない」

くっ、と白坂は唇を噛む。確かにそれなら可能だろう。けれど――

「どうしてこんな事をする！」

魔法の使える時点で竹芝は新人類だ。旧人類ならともかく、新人類がそんな事をする必要は無いはずだ。

「何でこんな事をするかって？ それは僕がハーフだからだ。旧人類と新人類のね」

竹芝は尚も銃を白坂に向けながら言う。ハーフ。旧人類と新人類の。そうか……そういう事かと白坂は納得する。竹芝が魔法能力を上手く使えないのも。あの日、歴史の授業で教師が旧人類狩りの話をしていた時に不快な顔をしていたのも。魔法を無力化にする魔法を学んでいたのも。今、こうしているのも。全部――ハーフだから。「こんな事をしてどうなる。それで誰かが救われるのか！ 確実に誰かが死ぬんだぞ！」

そんな事をしたら世界は混乱するし、今まで魔法によって支えられていた人たち――雪野沙希のような人は死んでしまう。

「僕が救われる。他の旧人類も」

竹芝はそう言っただけで手を掛けた。

「一定高度に達したらこの粉を散布する。その方が広範囲に散布出来るからね」

そう言っただけで奥の部屋に入り、扉を閉めた。

「そんな自己満足で……！」

扉を叩きながら拳に力――魔力を込める。だけれど何も起こらない。魔法を無力化にする魔法は本当に完成したのだ。その時、そう感じた。

絶望感だけが白坂の身を残酷にも包み込んだ。

どのぐらいの時間が経ったのか、どのぐらいの高度に居るのか分

からない。

白坂は壁に寄り掛かり、時が過ぎるのを待った。もうどうしようもない。魔法が使えないのだから抵抗さえ出来ない。新人類は魔法が使えないとこれほどにまで弱くなるのか。白坂はそう悪態をついた。

暫くし、奥の扉から騒がしい音が聞こえるようになった。

そして勢いよく扉が開き、竹芝はある一点を見つめていた。竹芝が居なくても航行可能なのは自動操縦だからだ。

「しまった、燃料が……」

竹芝は思わず、手に持っていた銃をその場に落としてしまった。

先ほどの発砲のせいで燃料タンクに穴が開いたのだ。このサイズならすぐ燃料が尽きる。

「くそつ、こうなったら……」

竹芝は扉を開けたまま、黄色い袋に手を掛けた。この高度から粉を散布する気なのだ。

だがそうはさせまいと、白坂は落ちている銃を拾い、銃口を竹芝に向けた。

「魔法を無力化にされ、人類が死に追いやられるぐらいなら、ここでお前を終わらせる。それが世の為だ」

「そんな事をしていいのか？ 燃料が無いんだ。生きて帰れなくなるぞ」

「それは、元々だろうが……」

反撃するなら今しかない。そう考えた白坂が引き金に手を掛けた時だった。飛行機が激しく上下左右に傾いた。

「しまった！ システムエラーが——」

そんな状況下でも竹芝は必死に黄色の袋を開けようとする。しかしそうはさせまいと、壁に体を打ち続けながらも彼は銃口を竹芝に向け、発砲する。

竹芝には当たらなかったが、黄色い袋に直撃し、中の粉が出始めた。

「この……馬鹿野郎が！」

そう叫び、白坂はもう一度竹芝に銃口を向けた。

しかし竹芝を撃つ事は出来なかった。その直後、飛行機は大きくバランスを崩し、墜落していったのだ。綺麗に輝く粉を撒き散らしながら、ゆっくりと。確実に。

魔法の無くなる日（後書き）

これで序盤は終わりですね。

改定前はここまで来るのに四ヶ月ぐらい掛かっていたのに、今回は数週間。何だか早いです。

さて、これからがこの話の本番ですね。

改定前版とはかなり変えた感じにしているつもりです。

何か後書きはこまめに書いたほうが良い、と聞いたので書きました。これからも頑張りますのでよろしく願います。

始まりの日

広い草むらの上で、竹芝は目を覚ました。上半身を起こし、周囲を確認する。

飛行機が無残にも草むらの上で炎上していた。白坂の姿は確認出来ない。一瞬、激しい頭痛が竹芝を襲う。頭を抑えながら考える。

どうして自分はここに居るのだろうか。あの高度から墜落したのだから生きている筈がない。それに、自分の服は傷一つついてなく新品のようだった。

——もしかして自分は死んでしまったのだろうか。

そう言った考えが脳裏をよぎる。けれど頭を襲うその痛みがそれを否定する。頭痛がこれほど恋しいと思ったことはこれが初めてだった。

——それにしても、失敗してしまったな……。

まさかあそこで白坂が来るなど、竹芝の予想外だった。元々魔法を無力化にする粉の使用範囲を広くする為、修学旅行先に飛行場があるのを確認してからこの作戦を実行したのだが……それが裏目に出たのだ。

とにかく、ずっとこの場に居る訳にもいかない。少し周りを探索しよう。

そう思っただけ竹芝が立ち上がった時、背後から聞きなれない声があった。

「目、覚めたか？」

振り返ると、そこには黒いコートの下に地味な服を着た中年男性が立っていた。

「……貴方は？」

どうしてここに居るのだろうと疑問に思い、竹芝はその中年男性に尋ねた。

「全く、面倒な事をしゃがって……。責任、取って貰うぞ」

中年男性は近付きながらそんな事を言う。

「責任。何の事だ？」

「お前のせいで、俺の計画が台無しになったんだよ。こうなったら一人で計画を完了させるのは難しい。協力してもらうからな」

「計画……？ すまない、何の事だ？」

「それは教えられないねえ。言っておくが、お前に拒否権は無い。拒否したって魔法で無理矢理にでも協力させる事が出来るんだ」

中年男性はそんな事を平然と言つてのける。

「大体、僕がなにをしたんだ？」

両手を使い、竹芝は中年男性にそう問いかける。この中年男性は魔法を使つてでも、と言つた。つまり魔法無力化は失敗したのだ。その他に自分は何かしたのだろうか？ そう思つての問いかけだった。

「ああ？ 何とぼけてやがる。お前、魔法を無力化させただろ？」

「え？」

竹芝は目を細めた。馬鹿な、今この中年男性は魔法を使つてでもと言つた。つまり魔法は無力化されていない筈なのに。

「何だ、都合よく記憶喪失かい？」

「いや……」

状況が理解出来ず、頭を抱えた。

「じゃあ、貴方は何で魔法を使えるんだ？ さっき、魔法使つて無理矢理にでもつて言つていた」

「さあ、何でだろうねえ。敢えて言うなら英雄だからだろうか」

笑いながら中年男性はそう言う。

「英雄？」

「俺は過去に世界を救つた英雄、ベスウェルだ」

中年男性——ベスウェルは黒いコートをなびかせ、そう言つた。

ベスウェル。言うまでも無く、過去に世界を救つた英雄。魔法のあまり使えない竹芝の憧れの人物。その為、旧人類狩りしたのはベスウェルだという噂を、竹芝は信じていなかった。

「ベスウエルなのか？ 貴方が、あの英雄の？」

「ああ、そうだ。あの英雄だよ」

そのベスウエルの答えに、竹芝は混乱する。英雄が何故こんな所に？ そして何をしようとしているのか？

「けれど……英雄だから魔法を使えるなんてのは意味が分からない話だ」

英雄だろうがなんだろうが。その魔法は通じるはずなのだ。

「まだ言える話じゃ無いんだよ。それで、だ。お前のせいで俺の計画は台無しだ。協力してくれるか？ 悪い話じゃない筈だぜ」

「最初っから選択肢は無いも当然なんだろう」

そこまで言って、竹芝は自分の口調に違和感を感じた。普段は割と丁寧な感じなのに。だけれど、今はこの方が何故か話やすかった。「協力する、という意味だと受け取ろう。それで、お前の名前は何か？」

「え、ああ。僕の名前は竹芝だ。竹芝裕也」

ほう、とベスウエルが頷く。

「それじゃあ、行くか」

そう言い、ベスウエルが歩き始める。

「え、どこに行くんだ？」

竹芝がベスウエルの背中に問うと、ベスウエルは拠点にだよ、と答えた。

——目の前に居る人物がベスウエルだという証拠はない。けれど、どうせもう竹芝は元の生活に戻ることは出来ない。白坂や奈三川たちにその魔法を無力化にする魔法の事を話してしまったからだ。

生きていくには、この目の前に居る人物に着いていくしかない。

竹芝はそう考えながら、ベスウエルの後ろ姿を追った。

「そっぴや竹芝。お前は何でこんな事をしたんだ？ 魔法を使えるならこんな事する必要は無いだろ。使えたらこんな事は出来ないんだだよ」

道中、ベスウエルが立ち止まらずにそんな事を聞いてくる。暇だ

から何となく、という口調だった。

「……僕はハーフなんだ」

俯きながら竹芝は言う。重々しい口調だった。

「ああ、なるほどね。新人類と旧人類のハーフか。それなら魔法が使えるのも頷ける。復讐って事か。しかし、面倒な事をしてくれたな」

ベスウェルは続ける。

「魔法を無力化したから、世界は混乱状態だ。今まで魔法で補っていたものが使用出来なくなっているんだからな」

竹芝はそのベスウェルの言葉を聞き、俯いてしまった。自分のやった事は正しかったのだろうか。そう考えてしまう。いや、だけれどこれは正しい事だったのだ。そう自分に言い聞かせながら、竹芝は尚も歩き続ける。

反抗武装組織

十二月十六日。魔法が消えたあの通称 Magic・Lost 事件——ML 事件から約二日後。

町外れにある小さな病院。その待合室で十数の人物が話し合いをしていた。

「やはり、今回のこの ML 事件は旧人類による仕業ではないのか？」
黒短髪の男性は椅子に座り足を組みながら、そう周りに居る仲間に話かける。手にはコーヒーの入ったカップを持っている。

「どうだろうな。旧人類なら魔法は使えない筈だ」

狭い室内で煙草を吹かしながら白髪まじりで短髪の男性は言う。

「どうかしら。もしかしたら魔法じゃないかも知れないし」

金長髪の女性はコーヒーを飲んでからそう言う。この女性が淹れたコーヒーだ。

「でもどっちにしろ、我々に有利な状況です。これからどうするんです？」

近くに座る男性が黒短髪の男性に問いかける。

「できれば ML 事件の主犯と合流したい所だ。我々以外にも新人類に反抗する者が居ると思っていなかったからな。……だが、それは出来そうにないだろう。何せ、どこで起こったことかも分からない」

そう答えてから黒短髪の男性はコーヒーを喉に通す。

「とにかく、これは好機だと思うわ。今しか行動の時は無いんじゃない？」

金長髪の女性は黒短髪の男性に提案する。

「そうだろうが、明確なプランはあるのか？」

白髪まじりで短髪の男性がその案に意見する。

「それはまだだな。そのプランはこれから考えよう。なるべく早く、な」

黒短髪の男性はコーヒを飲み、そう言った。

彼らは反抗武装組織だった。新人類に復讐を誓う——過去の旧人類狩りを生き抜いた旧人類の集まり。

白いコートに身を包み、奈三川は総合病院の前に立っていた。学校は今、ML事件のせいで休校中だ。

結局修学旅行は中断され、生徒は古い系統のバスで帰された。元々乗っていたバスは魔法によるエネルギーで動いていたからだ。

ML事件からまだ二日しか経っていないが、もうそれ程世界は混乱はしていない。人々はそれ程魔法に依存しきっていないかったという事なのだろうか。幸い、旧人類狩りの前まで旧人類が使っていた発電施設などもそのまま残っていたし、それによって何とか人々は生活している。前に比べたら不便だし、一部の地域ではまだ混乱しているが。

一体何が起こったのか？ 混乱状態から抜け出しつつも、世界はその話題で持ち切りだ。一部の人は、『魔法を無力化にさせる魔法——幻想魔法だ』だの『旧人類の呪いだ』だのと言っている。研究者の中には『魔法は完全に解明出来ない。魔法を発生させる物質が消滅したのではないか』と主張する者も居る。

世界の人々はどうしてこうなったのか理解できていないだろうが、奈三川はどうしてこうなったのかを知っていた。

——魔法を無力化にする魔法。竹芝は十年間、それを学んでいた。それが完成したのではないか？

そう考えたが、確かめようがない。白坂も竹芝も修学旅行先で行方不明になっている。搜索しようにも、手がかりが少ないため捜査は難航している。よって、事実は今現在不明だ。

奈三川は病院の扉を開け、中に入っていく。院内に人影は無い。

この病院は魔法を使って治療をしていた。その為か、院長を含む従業員は他の魔法による治療を行ってない病院へと異動してしまった。魔法が存在していても、その様な病院は需要がある。完全に解明出

来ていない魔法による治療は嫌だ、という御老人も居るからだ。

階段を上がり、長い廊下を歩く。慌ただしかったからだろうか。

病院内は様々な物が散乱しており、酷く荒れていた。三〇五号室と書かれた部屋の前で止まり、ドアを開ける。

「元気だった？ 沙希」

手を挙げ、奈三川は元気よく言った。

「うん……元気……」

明らかに元氣のない声で答えたのは奈三川の彼女である、雪野沙希だった。

雪野はこの病院が潰れても尚、ここで過ごしている。二日ほど前、院長から退去命令が出された。他の病院に異動しようと。

しかし、雪野はそれに応じなかった。『ここは私の家だから』と命令に反対したのだ。雪野は生まれてからずっとこの病院で時を過ごしている。雪野にとってこの病院は家に等しい。

院長はそれを無言で承諾した。院長も分かっているのだ。魔法による治療が無ければ雪野は生きていけないという事に。無論、雪野もそれを分かっているからここに残りたいと主張したのだ。

それを聞いた時、奈三川は何も言わなかった。せめて最後までいは雪野の望むままにさせてあげよう、と思ったのだ。

雪野の寝ている横に座り、奈三川はそっと、白く綺麗な手を優しく握った。その手は冷たかった。

「ご両親は……まだ来ていないのかい？」

奈三川は雪野に優しく問う。病室内に雪野の両親の姿はなかった。

「……うん。まだちょっと忙しいみたい……」

雪野は力なくそう答える。もう相当身体が辛いみたいだった。

「……そうか」

就学旅行の前日に雪野の両親と話した奈三川。雪野の両親が仕事人間である事は既に理解していた。せめてこんな時ぐらい傍に居てくれたら良いのに、と最初考えたが、雪野を――人を十数年この病院に居させるにはそれなりにお金が必要だ。両親が仕事人間になっ

たのは雪野の為だと理解した奈三川はそんな事を口にはしなかった。

「ねえ、奈三川さん……」

雪野がか弱い声で言う。

「なに？」

奈三川は笑顔を浮かべながら首を傾げた。

その言葉に、奈三川は一瞬動揺した。だが暫くして、どうして雪野がそんな事を言ったのかを理解する。

昨日、奈三川は雪野に言った。竹芝が魔法を無力化にする魔法を学んでいる事、そして今回のML事件の犯人は竹芝ではないかという事を。その推理が間違っていると言ってもらいたいが為に。

「……何を言っているんだい。昨日のは冗談だよ。笑えなかったかな。ごめん」

優しく雪野に微笑みかける奈三川。けれど本心はそれとは正反対だった。奈三川はML事件の犯人は竹芝だと思っている。

「そう。それなら、いいけど……」

そう言いながら雪野は天井を見上げた。

ML事件の犯人は竹芝だと思っている奈三川だったが、どうして竹芝がそんな事をしたのか理解は出来ていなかった。あの時は幻想魔法かどうか試したいと言っていたが――。

雪野の手を掴みながらそんな事を考えていた奈三川だったが、突然雪野に手を払われたのを疑問に思い、思考を止めた。

「……沙希？」

突然の事に訳がわからず、奈三川は雪野に問いかける。しかし返事はない。

「おいどうしたんだ、沙希！」

雪野の身体を揺らし、奈三川は更に問いかける。

「ごめんね……奈三川さん。何だか苦しくて……」

雪野は酷く咳き込んでいた。どうやらもう無理らしい、と奈三川は悟った。

「だ――大丈夫だ！ 早くこれを――」

もう無理だと悟りながらも。奈三川は机の上に置いてある緊急用の薬を差し出した。これを使えばまだ何とか命を繋ぎとめる事が出来る。

「でも、良かった……。パパとママには会えなかったけど……。最後に貴方が傍に居てくれて……」

雪野は薬を受け取らなかった。もう無理だと、雪野自身が悟っているのだ。

「最後なんかじゃ無い……。まだ、最後なんかじゃ……！」

奈三川は雪野の手を、再度強く握った。薬を渡すことは無意味だと思ったからだ。

「奈三川さん……。短い間だったけど……。今までありがとう……」

それっきり雪野は喋らなくなった。既に息はしていなかった。

それを確認してから奈三川は静かに雪野から手を離し、ベッドに向かつて拳を叩き付けた。

くそつくそつくそつくそつ——そう叫びながら、何度も拳を叩き付ける。

魔法さえ使えればこんな事にはならなかった。魔法が今でも存在していればまだ沙希は生きられた。——それなのに、全てはML事件のせいだ。

「竹芝……。あいつだ。あいつが全て悪いんだ！」

奈三川は今までにないぐらい強い勢いで拳をベッドに叩き付けた。

仲間集め

ベスウェルはどんどん歩を進めていく。やがて山に入り竹芝がどこまで行くんだと不審に思ったところで、ベスウェルは足を止めた。「ここが俺の拠点だ」

ベスウェルは目の前にある小さな拠点を指差す。

「拠点。え、これが？」

竹芝は驚きを隠せず、首を傾げながらベスウェルに問う。木板だけで作られた建物。これは拠点というよりはただの倉庫だった。

「何だその顔は。地味だつて言いたいのか？ 派手だと困るんだよ。周りにバレるしな。これぐらいが丁度いい」

そう言いながらベスウェルはその『拠点』に入っていく。その小屋は地味というよりは質素だった。

「さて、大事な話をしよう。これからしてもらふ事のだ」

小屋の中からベスウェルの声が聞こえる。それを聞き、竹芝も小屋の中に入る。

小屋の中を見渡す。床には絨毯がひいてあり、その上には木製の机と椅子が置いてある。隅には毛布が数枚置いてあった。

「さて、これから俺は仲間を集めようと思う。計画実現の為には協力者が必要になるだろうからな」

ベスウェルは小屋の中央に鎮座してある椅子に腰を下ろしながら言う。

「確かに仲間が必要だとは思うが……そんな協力者なんて居るのか？ 僕はハーフでありML事件の主犯だからという理由で協力しているつもりだけだ」

竹芝は小屋の入り口の所で立ちながら問う。計画が何なのかも説明しないベスウェルに協力する者なんて滅多に居ないだろう。

「居るさ。お前みたいな旧人類がな」

竹芝の問いにベスウェルはそう答える。確かに、今の世をひっそ

りと誰にも見付からずに過ごしている旧人類狩りを生き抜いた旧人類ならば協力してくれる可能性もあるだろう。

「けれど、どうやって探すんだ？」

旧人類は新人類に見付からないように日々を過ごしている。それを見つけるのは困難だろう。竹芝みたいに、ハーフで若干の魔法を使える者ならば表に出てきているだろうが。

「何だ、忘れたのか？ お前がやったんだろ、魔法の無力化を。今現在、ML事件のせいで新人類は魔法を使えない。新人類と旧人類の違いは魔法を使えるかどうかだけだ。外見の違いはない。旧人類が表に出てきている可能性だってあるだろう」

ああ、と竹芝は納得する。確かに、この状況なら旧人類だって表に出てきている可能性もあるだろう。何せ、今は新人類と旧人類の違いは何もない。

「でも、一人一人いちいち聞いていくのか？ 旧人類ですかつて。

不審に思われるし、時間もかかるだろ」

そう竹芝が言うと、ベスウェルは椅子の背もたれに寄りかかりながら答える。

「大丈夫だ。旧人類かどうかは見れば分かる。そういう魔法を使えば良いんだ」

そんな新人類か旧人類かを見分ける魔法はあるのか？ と竹芝は首を傾げる。ハーフで魔法を上手く使えない竹芝にはよく分からなかった。

——しかし、本当に何で貴方は魔法が使えるんだ？

そう問おうとして、竹芝は口を閉じる。どうせ言ってもさっきと同じ答えしか返ってこないだろうと判断したからだ。

「と、いう訳だ。早速始めようぜ」

ベスウェルが椅子から立ち上がる。

「始めるって、仲間集めをか？」

「当たり前だ。さあ、行こうぜ」

そう言うベスウェルは入り口の所で立っている竹芝の横を通り、

小屋を出ていった。竹芝も振り返り、それに続いた。

近くの町に向かう。

町は普段と何ら変わりはないように見える。もうそれ程混乱していないからだろう。

二人は町の中を歩いていく。ベスウェルは目を細め、辺りを見回し続けている。しかし、見付からない。

「……やはり、旧人類は見当たらないな」

尚も目を細め辺りを見回しながらベスウェルはそう呟く。

「そもそも、どうやって旧人類かどうかを確かめているんだ？」

竹芝はベスウェルに問う。どういつ方法で確かめているのかは竹芝には分からなかった。

「魔法を使つて、今までにどれだけ魔法を使つた人間なのかを確かめている」

ベスウェルは竹芝に言う。新人類なら、日々魔法を使う。だが、旧人類やハーフなら魔法を使っていないし、使つていたとしても使用頻度は低いだろう。ベスウェルはそれを魔法で確かめているのだ。計画実現の為、ベスウェルにとって出来ればこの方法は避けたかったが。

「……凄いな、魔法つてのは。そんな事も出来るのか」

竹芝は感嘆の声を漏らす。そんな魔法が存在しているとは知らなかった。

「出来るぜ。まあ、こんな魔法は使えても意味が無いし、使えるのは俺を除いて数人ぐらいだろうな」

「へえ……そうなのか」

竹芝はそんな声を漏らす。世の中には幻想魔法というものがあるが、実はそんな幻想魔法なんて存在しないんじゃないか、と竹芝は一瞬思ってしまった。事実、魔法を無力化にする魔法は使えた。

「おっ——」

ベスウェルが声を漏らし、ある一点を見つめる。竹芝はその視線を追う。そこには二人の中年男性が立っていた。一人は体格が良く、

茶髪の中年男性。もう一人は体格はあまり良さそうのない黒短髪の中年男性。

茶髪の中年男性である『喜多倉和正^{きたくらかずま}』は人の行きかう町を歩いていた。隣では先ほど町で出会った黒短髪の中年男性、『田中健二^{たなかけんじ}』が歩いている。

先ほど歩いている時に肩をぶつけてしまい、その時のやり取りで二人はお互いが旧人類である事を知ったのだ。それで二人はある場所に向かっている。

——こうして歩いてみると、何一つ変わっていないな。

喜多倉は歩きながらそう思う。通り過ぎる人も。周囲にある店も。何一つあの日から変わってないように思えた。あの日——十年前の旧人類狩りの日から。

あの日、喜多倉は何とか新人類の旧人類狩りから逃れることが出来た。しかし、逃れたからといって元の生活に戻れる訳ではなかった。それから、新人類による襲撃があるのかと怯えながら過ごすしかなかった。買い物などでは新人類も魔法は使わないから何とか出来たが、それ以外の事は殆ど何も出来ない。新人類襲撃の危険性も減り、最近は仕事も何とか出来るようになったが……それでも内職や郵便が限界だった。周囲の目が怖い。まだ偏見は続いているからだ。

「なあ。本当にあるのか？ 新人類に反抗しようとしている組織って」

隣を歩いている田中が喜多倉に問う。今。二人は新人類に反抗しようとしている組織を探していた。以前から噂は聞いていたが、このML事件をきっかけに喜多倉はその組織を探すことにしたのだ。隣に田中が居るのは先ほど誘ったからである。

「多分。新人類は都市伝説程度に思ってるだろうが、俺はあると信じている」

そう喜多倉が言った直後、前方から二人の男性が歩いてきた。別

に人が多いのだから人とすれ違うことも度々あるのだが、その二人は明らかに動きが違う。喜多倉と田中を見据えてこちらに向かってくるからだ。一人は黒短髪の中年男性。もう一人も黒短髪だったが、まだ学生くらいの年齢だった。

その二人の男性が喜多倉と田中の前で立ち止まる。喜多倉がそれを不審そうに見ていると、目の前に中年男性が言った。

「君たち、旧人類だろ？」

その言葉に喜多倉は動揺する。もしかして新人類で、旧人類狩りを――。

そんな嫌な予感が喜多倉の頭をよぎったとき、中年男性は言った。「俺はベスウエル。過去に世界を救った英雄だ。そしてこの隣に居るのは――ML事件の主犯だ」

中年男性は小声で言う。突然の事に喜多倉と田中が戸惑っている。と、中年男性は手を喜多倉に差し出し、続けて言った。

「俺たちに協力しないか？」

仲間

「えっ？」

突然の出来事に、喜多倉は動揺していた。今、目の前に居るのはあのML事件の主犯である人間なのだろうか。旧人類に未来の光を射してくれた人間なのだろうか。

「本当に貴方は英雄で、隣に居る人間はML事件の主犯なのか？」

ベスウェルはそうだ、と頷く。

「しかし、どうやって？ そんな事が可能なのか？」

喜多倉はML事件の主犯を見つめながら問う。世界を救った英雄より、旧人類にとっては魔法を使えなくしたML事件の主犯の方が英雄であった。

「幻想魔法を使ったんです。魔法を無力化にする魔法は矛盾があるから幻想魔法でしたが、あの魔法を魔法でない何かにする事で可能にしました」

丁寧な口調でML事件の主犯は言う。嘘をついている様子はない。

「しかし……協力とは、何に？」

田中はベスウェルに問う。何に協力するかが分からなかったら出来るわけがないのだ。

「それはまだ言えない。しかし、君たちにとって不都合ではない筈だ。金だって欲しければ渡す。どうする？」

ベスウェルの言葉を聞き、どうする、と二人は顔を見合わせる。

確かに金は欲しい。今ではろくに働けないからだ。それに、目の前に居るのはML事件の主犯だ。協力して損は無い気がする。そもそも、彼らがあの噂の反抗組織は。ならば断る必要は無い。

やがて、二人の意見が一致する。

「分かった、協力する。どの道、このままじゃ生きていけないからな」

喜多倉は頷き、差し出しているベスウェルの手を握った。

結局、それからは旧人類を見つけることは出来なかった。しかし、二人の協力者を得られただけでも充分だろう。日も暮れた頃、四人は食事をしてから揃って木々に囲まれた拠点に戻った。

「……これは一体？」

田中が目の前にある木板で作られた小屋を見てベスウェルに問う。
「何って拠点だよ拠点。ここで寝泊まりするんだよ」

ベスウェルがまるで単純な計算式の答えを教えるかのような口調で説明する。当然だろ、とでも言いたそうだな、と竹芝は思った。

「いや……さすがに寒くないか？　今は冬だぞ」

喜多倉がベスウェルに言う。今は冬。夜はかなり冷え込むだろう。
「中に毛布がある。それを使い」

そう言いながらベスウェルは真つ暗な小屋の中に入り、入り口近くにあるスイッチを押した。すると天井に付いていた一つの豆電球が寂しく光始める。まだ少し薄暗いが、先ほどよりは幾分かましである。

「げっ」

小屋に入った途端、喜多倉が露骨に不平の声を漏らす。小屋の中には木製の椅子と机しかないし、頼みの毛布も薄く安っぽい物だったからだろう。

「さて、今日はもうこんな時間だ。活動は明日からにしよう」

ベスウェルはそう言い、小屋から出ていく。

「あれ、一体どこに行くんだ？」

竹芝は首を傾げる。何か用事でもあるのだろうか。

「ああ、ちょっとした用事だ。あまり気にしなくて良いぜ」

そう言うのと、気の抜けた感じで手を振りながらベスウェルは山を下りていった。

喜多倉と田中は小屋の床に腰を下ろした。会話は一切無い。

「あー、じゃあ僕はこれで寝ます。お休みなさい」

少し気まづくなった竹芝はそう言って毛布を持ち出し、絨毯の上

で横になる。そうしてから竹芝は布団を被り、眠りについた。

「なあ、田中」

目の前で横になっているML事件の主犯が眠りについた事を確認してから、喜多倉は横に座る田中に言った。

「ん、どうかした？」

言いながら、田中は首を傾げる。

「これから少し外で話さないか？」

小屋のドアを親指で示しながら喜多倉はそう提案する。

「外？　ここじゃ駄目なのか？」

「ああ。ここじゃ聞かれる可能性があるし」

ML事件の主犯を顎で示しながら言う。

納得出来なかったが、田中は取り敢えず喜多倉に続き、外に出ることにした。

夜空には星がいくつも輝いている。だからだろう、電気のないこの場でもそれほど暗くはなかった。

「それで、話つてのは？」

小屋から少し離れた所で田中は喜多倉に言う。

「ベスウエルという奴のこと、どう思う？」

地面に腰を下ろし、喜多倉は田中に問いかける。

「ベスウエル。確か、過去に世界を救った英雄だろう？　本人もそう言っていたし」

田中も地面に腰を下ろし、そう答える。

「確かにそうなんだが、証拠はないだろう。一応ML事件の主犯の方は信じているが、あちらさんは信用できん」

「そうだよな。それに、ベスウエルが旧人類狩りの主犯だっていう噂もあるし」

田中は顎に手をやりながら思案する。

「まあ、あれは証拠もないただの言いばかりだけどな」

喜多倉が言う。ベスウエルが旧人類狩りの主犯だという噂が流れ

たのは失踪時期と重なったからだ。逆に言えばそれしか理由はない。『だが勿論、旧人類狩りの主犯がベスウェルという証拠が揃ったならあいつを殺す。そうでなくてもML事件の主犯といればその旧人類狩りの主犯に近づくことは出来るだろう。とにかく、明日はそのML事件の主犯との親睦を深めようぜ。まだ名前も知らないしな』
そう言っ
て喜多倉は立ち上がった。

自己紹介

朝、竹芝は寒さで目を覚ました。こんな毛布ではこの冬の寒さを凌ぐ事など当然出来ない。

毛布を全身に巻きながら竹芝は周囲を伺う。小屋の中にベスウェルたちの姿はなかった。

——もしかして寝過ごしてしまったのだろうか。

少し不安になりながら小屋を出て、周りを見る。しかし結果は同じでそこには誰もいない。

うーん、と唸りながら竹芝が辺りを搜索しようとした時、背後から声が聞こえた。

「へえ、随分起きるのが早いんだな。まだ朝方だろ」

振り返ると、そこには喜多倉が居た。昨日は色々と慌ただしかった為、ろくに自己紹介も済ましていない。お互いの名前も知らなかった。

「え、あつ、はい。そういう貴方も随分早起きなんですね」

竹芝は喜多倉に言う。年代的にはベスウェルと変わらない気がするが、何でだか丁寧な口調になってしまう。と言っても、普段はこういう口調ではあったが、何故かML事件の日以来、竹芝はベスウェル何かに使う口調が普通になってきていた。MLという昔からの思いを達成出来たから心境的にも変化があったんだろうか、と竹芝は思っている。

「ああ、少しお手洗いに行きたくなってね。この小屋、便所が無ければ風呂も無いだろ」

この小屋には便所や風呂はない。外に小さな井戸がある程度だ。小さいのだから仕方がないが。

「あれ、でももう一人は？ 一緒じゃないんですか？」

竹芝は小屋に入ろうとする喜多倉を呼び止める。近くに田中の姿はなかった。

「さっきまでは一緒だった。もう少ししたら帰ってくるんじゃないか？」

そう言いながら喜多倉は小屋の中に入り、床に腰を下ろす。

「じゃあ後はベスウエルだけか……」

顎に手をやり、思案する竹芝。今ベスウエルがどこに居るかが知りたかった。

「そついやあの奴、昨夜から一度もこの小屋に帰ってきてないな。何か用事でもあるのか？」

座りながら首だけを竹芝に向け、喜多倉は問う。

「さあ。僕もあまり詳しくは聞いてませんし」

首を振りながら竹芝は言う。

「そつか。全く、何をするかも説明しないで何したいんだか」

喜多倉がそんな悪態をついた時、近くから足音が聞こえた。音のした方を見ると、そこにはベスウエルが居た。手にはビニール袋が握られている。

「……ベスウエルか。今までどこに居たんだ？」

喜多倉がベスウエルに問う。

ベスウエルは小屋の中に入ってからその問いに答える。

「どこに居たってそれは俺の自由。違うか？」

「悪いが、俺はまだあんたの事を信じていないんだ。親睦を深めるために話してくれたって良いんじゃないのかい？」

喜多倉は苛立ちを隠せずに言う。ベスウエルの黙認主義に耐えられないのだろう。

「そつか。では話すでしょう。俺はパンを買うために外に出ていた」
そう言ってベスウエルが手に持っていたビニール袋を机の上に置く。中にはパンが幾つか入っていた。

「ほう、こんなに時間かけてか。品薄だから開店前にでも並んでいたのかい？」

喜多倉が少しふざけた感じで言う。

工場などの機械は魔法を動力にしているが、簡単に電力供給に変

更することが出来る。電柱も魔法動力を運ぶために設置されているし、別段工場の機能が停止した訳では無いので、当然パンが品薄になる筈はない。それは喜多倉なりの皮肉であった。

「ああ、そうだ」

だがその皮肉はベスウエルには通じない。ベスウエルはさつさと小屋を出ていこうとする。

「どこに行くんだ？」

竹芝はベスウエルの後ろ姿に問う。

「仲間探しに行ってくる。お前らはこの小屋で待機していてくれ」手を振りながらベスウエルは木々の中に消えてしまった。

「何なんだよ、あいつ」

舌打ちをしながら喜多倉はそう言った。

田中が戻ってくる。それからベスウエルが買ってきたパンを食べることにした。少し早めの朝食。

「なあ、君に紹介したい場所があるんだ」

パンを食べ終えた後、喜多倉が竹芝に言う。

「紹介したい場所？」

パンの袋を片付けながら竹芝は首を傾げる。

「ああ、そうだ。着いてきてくれ」

喜多倉は立ち上がり、田中と共に外に出ていく。何なのだろうか、と不思議に思いながら竹芝も外に出る。

喜多倉は小屋から西に五十メートルほど離れた所で地面に腰を下ろした。周りは木々だけに対して、その場には何も無い。

「紹介したい場所ってここですか？」

「紹介しよう。ここが俺たちの拠点だ」

喜多倉は両手を広げ、そう言った。

「拠点、ですか。それはあの小屋で充分なんじゃないですか？」

喜多倉と田中は地面に腰を下ろす。

「それはまあ、雰囲気だ。気にしないでくれ」

喜多倉は竹芝を見上げて言う。

「雰囲気？　どういう事です？」

竹芝は地面に腰を下ろしながらそう問う。

「まあ、ベスウエルに反抗しているって感じのかな」

田中が口を開く。

「そうそう。俺はまだベスウエルの事は信用していないからな」

それは仕方のない事なのかな、と喜多倉の発言を聞いて竹芝は思う。確かに、ベスウエルは信用出来ない。魔法といい計画といい、隠し事が多いのだ。

「それで、ここはベスウエルには見付からない秘密の場所ってことだ」

喜多倉は続ける。

「さて、まずは自己紹介でもしようか。俺たち、まだしてないだら？」

確かに、と竹芝は思う。昨日会ってから一度も自己紹介をしていなかった。

「俺は喜多倉和正。知ってると思うが旧人類だ。これからどうなるか分からない。よろしく」

喜多倉は竹芝に手を差し出す。竹芝はその手を握った。

「僕は田中健二だ。喜多倉と同じく旧人類だ。まあ喜多倉とは昨日会ったばかりだけれどな。よろしく」

田中も竹芝に手を差し出す。今度は慣れた手つきで竹芝は握り返した。

「えーっと。僕は竹芝裕也です。新人類と旧人類のハーフです。よろしく」

今度は竹芝が手を差し出し、喜多倉、田中と握手をする。

「へえ、ハーフか。という事は微力ながら魔法を使える。それで幻想魔法を使ってみせたのか」

そう言いながら喜多倉は再度手を竹芝に差し出す。そして喜多倉は続ける。

「君のおかげで助かったよ。M L事件の犯人は旧人類にとっては英雄だ」

「え、ええ。ありがとうございます」

竹芝は喜多倉の手を握り返す。やっぱり、自分のやった事は間違いでなかったと竹芝は改めて感じた。

「その敬語は止めないか？ ベスウエルに対しては敬語じゃないだろ？」

喜多倉が提案する。確かにベスウエルに対しては敬語ではないし、今はベスウエルと話すときの口調の方が話しやすい。初対面だからと敬語で話していた竹芝だったが、相手が望むのならそれで良いだろう。

「分かった。じゃあ、これからはこれで」

竹芝がそう言っていると、喜多倉は納得したように頷く。そうしてから喜多倉は続ける。

「さて、では本題に入ろう。ベスウエルの事だ」

「ベスウエルがどうかしたのか？」

竹芝が首を傾げる。

「あいつが旧人類狩りの犯人だという噂があるのは知っているか？」
喜多倉が竹芝に問う。そのような噂があるのは知っている竹芝だったが、それを信じてはいなかった。

「知っているけど、信じてはいない」

そう竹芝が言っているとふむ、と喜多倉は顎に手をやった。

「まあ証拠も何もない噂だしな」

田中が言う。

「やっぱりか。俺も完璧に信じている訳ではないが……ただ、ベスウエルが旧人類狩りの犯人だった場合、俺はベスウエルを殺すつもりだ」

その喜多倉の発言を聞いても特に竹芝は驚いたりしなかった。旧人類にとってあの旧人類狩りの犯人は復讐対象だ。そう考えて当たり前である。

「でも……もしベスウェルがそうじゃなかったらどうするんだ？
ここに残るのか？」

竹芝は問う。——竹芝にとっては『もし』ではなく『確実に』だ
ったが。

「それでも俺はここに残るよ。他に出来る事もないからな」

喜多倉は寂しそうにそう笑った。他に何も出来ない。——それは
旧人類だから。

変電所

それから三人は小屋に戻り、夜でもないのに寝ることにした。特にすることがなかったからだ。ここは山奥で小屋以外には何も無い。昼頃、誰かの声で竹芝は目を覚ました。暫くし、それが喜多倉の声である事が分かった。

「……どうかした？」

小屋で横になり寝ていた竹芝は布団をどかしてから上半身を起こし、そう問う。

「ベスウェルから呼び出した。外で待つてる」

そう言っていると、喜多倉は田中にも声をかける。竹芝は立ち上がり、二人より早く小屋を出た。

小屋の外にはベスウェルの他に一人の男性が立っていた。喜多倉と体格が似ていた。

「協力者か？」

遅れて出てきた喜多倉がベスウェルに向かって問う。

「そうだ。悪いかな？」

ベスウェルの問いに喜多倉は否定的に首を振る。

「そうか。では紹介しよう。『丘雅人』だ」
おかまさひと

ベスウェルはそう言って小屋のドアノブに手をかけた。詳しい紹介は例によって無しだ。

「会議を行う。これから先どうするか、そろそろ決めようじゃないか」

ベスウェルは小屋の中に入っていく。三人は丘に会釈してから小屋の中に入った。その後、丘も小屋の中に入る。

小屋の中に入ると、ベスウェルは床に座っていた。テーブルは端にどけられている。

四人も床に座り、ベスウェルが話し始めるのを待つ。

「さて、これから先どうしようかね」

ベスウェルが口火を切る。

「どうするって……これからまた仲間集めなんだろう？」

喜多倉が太ももの上で頼杖をつき、退屈そうに言う。

「いや、もう仲間集めは行わん。確かに仲間は多いほうがいいが、そんな簡単に旧人類を見つけれないしな」

そう言うってからベスウェルが続ける。

「これから、俺たちはこの付近の変電所を支配する」

「支配する？ 変電所を？」

喜多倉が首を傾げた。他の者も同じように首を傾げる。どういう事なのかよく理解できなかった。

「そうだ。計画の為にな」

ベスウェルが座りながら壁に寄り掛かる。

「へえ、そうか」

喜多倉が言う。計画が何なのかは聞かない。聞いても無駄だと知っているからだ。

「さて、では早速始めようか。外に車が止めてある」

そう言うつとベスウェルは小屋の外に出た。慌ただしいな、と竹芝は思いながら外に出る。他の三人もそれに続く。

「それで、これから変電所に行くのか？」

小屋の近くに止めてある車の助手席に座りながら竹芝は運転席に座るベスウェルに問う。

「ああ、そうだ」

ベスウェルがそう答えるのと同時に他の三人が後部座席に乗り込む。四人用の車だが詰めれば五人でも入ることが可能だ。

「よし、全員乗ったな？ 出発するぞ」

木々を避けながら、車は山を下りていく。やがて道路が見えてくる。道は空いていた。現在の車両は魔法を動力に動いている。しかし今は魔法が使えない。中にはガソリンや電力を動力とする車両もあるが、それらは少ない。

「そついや、この車はどこから手に入れたんだ？ そんな容易な事

ではないと思うんだが」

喜多倉が後部座席でベスウェルに問う。当然の疑問である。

「この車か？ まあ簡単に手に入ったさ」

ベスウェルはそうだけ言って黙り込んだ。まさか盗んだのだろうか、と竹芝は助手席で思う。

「ん、あれは検問じゃないのか？」

暫く走行を続けた後、竹芝が目の前を見ながらそうベスウェルに言う。そこには数名の警察官が立っていた。

「ああ、そのようだ。ML事件の後だ。仕方がないな」

ベスウェルは落ち着いた声で言う。この時期、警官だって人員不足の筈だ。どれか一つに検問を絞るとしたら、自動車が一番だろう。ML事件の犯人なら、魔法が使えなくなる事は当然分かっている。移動手段として古い動力の自動車を使うと警官は睨んだんだろう。

「ベスウェル、運転免許は持っているのか？」

田中が後部座席から心配そうにベスウェルに問う。素性を明かさないうような人物は免許証など持っていない、と思っているのだろう。

「問題はない。心配するな」

ベスウェルはゆっくりと車を走らせる。

「その車、止まって免許証を見せる」

警察官が運転席の窓を乱暴に叩く。

——随分乱暴なものだ。

竹芝は助手席でそう思う。それだけML事件は人類にに対して驚異を与えたのだろうか。

ベスウェルが車を止め、窓を開ける。止めたと同時に、もう一人の警察官がトランク・ルームに手を掛ける。

「早く運転免許証を——」

警察官がそう言った瞬間、ベスウェルはポケットから出した紙切れを警官に見せつけた。

「よし、通って良いぞ」

トランク・ルームに手を掛けていた警察官と窓の近くに居た警察

官が引き下がる。

「ご苦労」

それだけ言つてベスウエルはまた車を走らせる。

「驚いた。どんな手品を？」

田中がベスウエルに問う。

「手品、ね。俺はマジシャンじゃないんだがね」

そう冗談まじりに言つてベスウエルは窓からその紙切れを捨てる。そこには何も書かれていなかった。

変電所に着く。

しかし近くに車を止める訳にはいかないので、変電所から数十メートル離れた場所で車から降りた。

「警備員は居ない、な」

ベスウエルが変電所の周囲を見回しながら言つた。

「確かに誰もいないな……」

喜多倉は言う。

「好都合だ。今の内に開始するぞ」

ベスウエルはトランク・ルームを開けながら続ける。

「とはいえ、油断禁物だ。各自これを持っておけ」

ベスウエルは黒く光る物体を四人に投げた。それは銃だった。

「へえ、銃か。どういう銃なんだ？」

受け取つた瞬間に喜多倉が言う。

「一九〇。年代に作られた銃だ。魔法を持たぬ者が、魔法を持つ者と同等になるべく作つた銃の一つ。名前は知らないがな」

それは丸み帯びたフレームの自動拳銃だった。

「しかしまあ、相手だつて『魔法銃』とか開発してたんだから無意味だつたけどな」

喜多倉が言う。魔法銃とは魔法を弾にした銃だ。主に魔法を上手く使えない児童や老人、更には攻撃系魔法を持たぬ者の間に多く普及した。

「銃、か。使った事がないな」

田中が銃に触りながら呟いた。それは竹芝も殆ど同じだった。あのM事件の時には形見の銃を使ったが――使ったのはそれが初めてだった。

「念のためだ。さあ、行こうか」

ベスウェルはそう言って歩きだした。

間木 真一

「さて、そろそろ活動を始めるとしようか」

小さな病院の待合室で黒短髪の男性——『間木真一』まぎしんいちが言う。

「決定したの？ 何をするのか」

金長髪の女性——『マリー・リーヒット』は間木に問う。

「ああ。取り敢えず、先ずは発電所を襲撃しようと思う」

間木は椅子に腰を下ろしながらそう言う。隣にある机の上にはコーヒーカップが置かれている。まだ淹れたてだ。

「発電所を襲うの？ どうして？」

マリーは首を傾げる。

「そこを襲えば混乱するだろうと思ってね。何事にも順序は必要だろう？」

足を組みながら間木はコーヒーを啜る。

「確かにそれはそうだろうけど……」

顎に人差し指をやり思案するマリー。

「どうした。何か疑問が？」

表情が想像より芳しくない。間木は首を傾げた。

「それは今からやるの？ 発電所を襲って町を混乱に導くのを」

「いや、発電所を襲うのは今からだが、機能を停止させて混乱に導くのはまた今度だ。それは遠隔操作でも出来るだろうしな」

間木は右の手の平をマリーに差し向けながら言う。

「そう。無計画って訳じゃないのね」

マリーは頷く。心配事はそれだけであった。

「さて、他に意見や反論、疑問がある者は居るか？」

間木は近くに立っている十数人の男女に問う。全員が首を振る。

「よし、大丈夫だな。では、始めよう。ゲーン、一号車の運転を任せても大丈夫か？ ついでにナビゲートも頼みたい」

部屋の隅で煙草を吹かしている白髪まじりで短髪の男性——『ゲ

「イン・マーカー」に間木は言う。

「運転は構わないが、どうしてナビゲートまで俺がやるんだ？」

煙草を人差し指と中指で挟み、口元で静止させつつゲーンは問う。
「そういうの得意だろ？ 俺は地図なんて読む習慣はないんだ。駄目なら他の者に頼むが」

「別に構わない。それに隊長の頼みだからな。ちょっと聞いただけさ」

携帯型の灰皿で煙草の火を消しながらゲーンは言う。

「感謝するよ。それでは行くとするか。俺は二号車に乗る。各自好きな方に乗ってくれ」

間木はそう言うってからコーヒーを飲み干し、病院を出た。既に必要な機材は車の中に運んである。

病院の駐車場には二台のワンボックスカーが停めてある。電力を動力とした車で三列シート八人乗りだ。間木はその二号車と仲間内で呼んでいる方の車に乗り込む。全員が乗り込んだのを確認すると、間木は耳に装着したヘッドセットに呼びかける。

「全員乗り込んだ。そっちはどうだ？」

「こっちもオーケーだ。目的地は近くの発電所で良いんだよな？」
ヘッドセット越しとは思えないほど鮮明なゲーンの声が頭の中に響く。

「ああ、頼む。それと、知ってると思うがこのヘッドセットの通信範囲は十メートルだから距離を意識して進んでくれると助かる」

「オーケー、分かった。じゃあ出発するぜ」

ゲーンがそう言った直後、隣の一号車からエンジン音が聞こえ、静かに動き出す。

「よし、じゃあ行くぞ」

乗車している仲間にそう告げると、間木はエンジンをかけた。そして一号車の後ろという位置を保ちながら進んでいく。なるべく山などを通るように心掛ける。道路には検問があるからだ。

「隊長。発電所に着いたらどうするんです？」

間木の後ろに座る男性が問う。間木はこの組織の隊長だ。

「ああ、まだ説明していなかったな。発電所には当然、人が居るだろう。まずはそれを制圧する」

間木は乗車している仲間全員に聞こえる声で答える。

「制圧って事は殺すのか？」

ヘッドセットからゲーンの声が聞こえる。

「いや、殺しは控えるべきだ。最悪、報復攻撃されかねない。制圧方法は気絶などの非殺傷のやり方ですべきだ」

間木は言う。舗装されてない道を走る車はがたんがたと揺れる。

「全く……俺たちはどれだけ我慢すれば良いんだか」

そのゲーンの声と共にライターを点火する音が聞こえる。

「ちよっと、煙草吸うなら窓開けてよ！」

マリーの慌ただしい声が聞こえる。車内という密閉空間でゲーンが煙草を吸おうとしたのだろう。ゲーンは愛煙家である。

「何だ、別に良いだろう。煙を吸えば幸せになれる」

「生憎だけど、私はそういうの信じてないの」

「何？　じゃあ随分前にあげたあの煙草、まだ吸ってないのか？」

「あれは——そ、そうよ。そんなの信じてないからね」

「何という事だ。もうあの一本しか無いからあげたというのに。吸わないなら返してくれ」

「嫌よ」

「信じていないなら——」

ヘッドセットから流れるその平和な話声を聞き、幸せそうに息を漏らしてから間木は笑う。

「おいおい、夫婦喧嘩なら余所でしてくれ。耳元で聞かされる身にもなってくれよ」

マリーとゲーンが付き合っているというのは仲間内ではもう知られている。昔は少し控えめだったのが、最近では度々この二人はいちやついている。人前でもだ。

「おっと、すまない隊長。すぐに電源を消す」

「そういう問題じゃないだろう」

ヘッドセットからゲーンの笑い声が聞こえる。それにつられて間木も笑う。

——もし、旧人類狩りが無ければ、この二人——マリーとゲーンはどうなっていたのだろうか。

間木は度々そんな事を思う。無論、旧人類狩りが無ければ二人はそもそも出会わなかったかも知れないが……それでも、その可能性はゼロではない。もしそうだったら、二人は今よりも幸せになっているだろう。ひょっとしたら既に結婚していて、子供も居るかも知れない。この二人だけでなく、この組織の仲間たちも旧人類狩りさえ無ければ――。

「隊長、大丈夫ですか？」

近くに座る女性が間木に言う。その言葉により間木はそんな思考を停止し、その女性を問いかけるように見る。

「何かぼーっとしてましたけど」

「あ、ああ。すまない、少し疲れが溜まっているようだ」

そう言いながら間木は片手で自分の頬を軽く叩く。無論、疲れなど溜まっていなかったが。

「私が運転しましょうか？」

その女性は立ち上がりながらそんな事を提案する。

「いや、それには及ばない。もう目は覚めた。心配しなくても大丈夫だ」

そう言つと、間木はハンドルを両手で握り、再び前を見て運転を始めた。

接戦

間木の前を走る一号車が突然停止する。何事かと、間木はゲーンに問う。

「しまった、記号を読み間違えたようだ」

ゲーンの声が聞こえる。ヘッドセット越しでも焦っている事が分かる。

「どういう事だ？」

間木はゲーンに問う。

「発電所じゃなくて変電所に来てしまった。完全に俺のミスだ、すまない」

「変電所？」

そう言われ、間木は窓から外を眺める。遠くに、何やら大きな機械が鎮座しているのが見える。だが規模的に明らかに発電所ではない。ゲーンの言う変電所なのだろう。

「別に構わないが……発電所への道は理解できたか？」

道案内を頼んだ側なのだから責めるのは忍びない。間木はゲーンにそう問う。

「それは今やっている。少し待ってくれ」

「そうか、頼んだ」

そう言って間木は再度窓の外に目を向ける。

——変電所には誰も居ないのだろうか。

窓の外を見て間木はそう思う。変電所一帯は確認できるが、人影は確認できない。

「——？」

どうやら無人ではないようだ。機械の影から人が出てくる。作業員だろうか。だがその手には拳銃らしき何かを持っているようにも見える。

「あそこに居る人、何してるんですかね」

間木の背後に座る男性が身を乗り出して言う。

「作業員が何かじゃないのか？」

「そういう風にも見えますけど、何か行動が不自然じゃないですか？ 銃みたいなの持ってますし、何か周囲も気にしてますし」

背後に座る男性は言う。変電所に居る数人の男は周囲を気にしている様子だった。

「確かに、そういう風にも見えるが……」

それじゃあ、目的は何なのか。間木は思案する。変電所の機械をいじっていて、尚且つ銃を持っていて――。

「ゲーン。目的地はここで良かったのかも知れない」

運転席で地図と睨めっこをしているであろうゲーンに間木は言う。

「ん、どういう事だ？」

「ゲーン、一号車に居る全員の降車を指示しろ。ここで活動を開始する」

間木は言いながら車の出入り口を二本指で示す。移動を指示するハンドシグナルだ。

二号車に乗っている全員が首を傾げながらも降車する。

「どうしてだ。発電所の予定じゃなかったのか？」

ヘッドセットからゲーンの声が聞こえる。

「変電所周辺に居る集団は見えるな？ 恐らく旧人類の集まりだ」

間木が言う。えっ、とゲーンが声を漏らす。

「何でそれが分かるんだ」

「この時期にこんな不審な事をする集団など、予想がつく。それにただの従業員の場合でも制圧して機会をいじくれば電力供給を止める事が出来る」

そう言いながら間木も車を降りる。

「そうか、分かった。全員、車を降りてくれ」

納得したゲーンが一号車に居る全員に降車を指示する。

「あれ、目的地はここなの？」

ヘッドセットからマリーの声が聞こえる。説明は後だ。

全員が車を降りたのを確認すると、間木はトランク・ルームに手を掛けながら全員に小声で言う。

「これから俺たちは変電所を制圧する。そこには複数の人間が居る。旧人類の場合は可能な限り協力を求め、新人類の場合は制圧しろ。ただし殺し以外での方法でだ」

トランク・ルームから自動小銃や自動拳銃を取り出し、全員に配布する。

「今までそれなりに訓練はつんできたつもりだが、人に向けて撃つのは初めてだな」

ゲーンは銃を触りながら言う。二人ともヘッドセットは車内だ。

「もう一度言うが、人殺しはするなよ」

間木が言う。

「オーケー、問題ない」

ゲーンが親指を立てる。

「では開始する。先ほど一号車に乗っていた者はマリーに、二号車に乗っていた者は俺に着いてきてくれ。マリーは左側から、俺は右側からだ」

「了解。全員、着いてきて」

マリーが一号車に乗っていた者に指示する。

「よし、俺たちも行くぞ」

間木は音をたてないように移動する。二号車に乗っていた者がその後を追う。

あの集団はまだこちらの存在に気付いていない。近くにある機械に隠れ、集団の数を確認する。五人だ。何れも中年男性だが、一人だけ例外が居る。間木は五本指を立て、二号車に乗っていた仲間に集団の人数を知らせる。

覗くと、何やら集団が作業しているのが見える。集団との距離はおよそ十メートル弱だ。

暫く待機していると二十メートルほど離れた地点にマリー率いる一号車グループが到着する。

間木はマリーに向かって集団を指で示し、その後自分の目を二本指で指して首を傾げる。見えてる？ と問うハンドシグナルだ。ヘッドセットを使うやり方もあるが、ちょっとした話声で敵に見付かる可能性がある為、この組織ではハンドシグナルで指示し合うことが多かった。全員、その指示の意味も理解している。

マリーは自分の目を二本指で指す。見えているのだ。

間木は深呼吸をしてから目を見開き、時計を五本指で叩く。四本、三本、二本——時計を叩く指は徐々に減っていく。そして時計を叩く指が残りゼロになった時。間木は握りこぶしで時計を叩き、叫んだ。

「ゴー、ゴー！」

敵を混乱させる為、盛大に叫びながら突撃する。仲間全員がその集団に向かって銃を構える。

集団は何事かと混乱しながら間木たちを見据えている。

「な、何だ？」

茶髪の中年男性が銃口を間木に向けながら素っ頓狂な声を漏らす。「全員、武器を捨てて両手を挙げろ」

両手で自動小銃を構えながら間木は言う。銃口は機械に向かって作業をしていた中年男性に向けられている。

「お、おいベスウエル。どうするんだ？」

集団の中では一番若いであろう男性が控えめに両手を挙げながら言う。酷く混乱している様子だ。

——ベスウエル？ ベスウエルと言えば世界を救ったあの有名な——。

そんな事を間木が思案していた時。作業をしていた男性が突然間木に向かって駆け出した。距離はおよそ十メートル。その男性はその距離を殆ど一瞬で駆け抜け、間木に向かって蹴りを繰り出した。「なっ——」

突然の事に間木はその男性の行動に対応しきれず、その蹴りをまともに受けてしまう。間木は後方に大きく吹き飛ばされ、腰を地面

に強く打ってしまふ。

話し合いもなしに突然攻撃してきた。話し合う余地はない。例えこの集団が旧人類の集まりだとしても協力してくれる可能性は低い。痛みを堪えながら間木はそう思案する。

「全員、攻撃しろ！　ただし致命傷は避けるんだ！」

仰向けの体勢で間木はその攻撃してきた男性に向かって銃を乱射する。手足を狙った攻撃。その銃弾は一直線にその男性の手足に向かい――男性の目の前で破裂した。

その不可思議な現象に、発砲しようとしていた仲間たちも動きを止める。

「おいおい、どういう事だよ……」

男性の前で散った銃弾の破片を見ながら大きく目を見開く。ML事件のせいで魔法は使えない筈。それじゃあ、何かの兵器でも使われたのか？　敵の銃弾を弾く兵器でも――。

仰向けの状態でその現象を必死に理解しようとしていた間木に向かってその男性は目を細めて言う。

「お前――旧人類か？」

「な――」

確かに間木は旧人類、魔法の使えない人間だ。どうしてそれを知っているのか？

「そこに居る奴等も全員旧人類か。魔法を使った形跡がない」

「……何を言っているんだ？」

魔法を使った形跡。何のことが間木には理解できなかった。

「質問は俺からさせてもらおう。どうしてここに居る。どうしてこんな事をしている」

男性は自動小銃の銃口を間木に向ける。

「敵に目的を話す馬鹿なんか居ない」

間木は言う。殆ど足掻きだったが、自動小銃の銃口を男性に向ける。

「敵、か。それはどうかね」

男性は自動拳銃の銃口を逸らす。

「……何？」

「君たちがここに居る理由。それは新人類に復讐する為だろうか？」

男性のその言葉に間木は口籠る。どうして目的を知っているのだろうか。

「俺たちもそうだ。新人類に復讐する為、ここに居る」

「えっ？」

男性がそう言った直後、茶髪の男性が首を傾げる。

「それなら——俺たちと協力しないか？」

男性は手を間木に差し出し、そう言った。

合流

「協力……どういう事だ」

黒短髪の男性は首を傾げる。

「さっき言った通りだ。新人類に復讐するのに協力してほしい」

ベスウエルは尚も黒短髪の男性に手を差し向けている。

——ベスウエルの目的はそれだったのか。

ベスウエルの背後で、竹芝は思う。どういう目的があつてこんな事をしているのか教えてもらえていなかったが、これで理解できた。ではやはり、旧人類狩りの犯人はベスウエルではないのか。

竹芝はそう思案し、内心ほつとした。喜多倉の『ベスウエルが犯人なら殺すかも知れない』という発言があつたからだ。

「しかし、それなら何故攻撃してきたんだ」

黒短髪の男性は地面から腰を上げる。

「敵だと思ったんだよ。すまなかつたな」

恐らくあの例の『魔法を使ったことがあるか』を確認する魔法は攻撃の後に使用したのだろう、と竹芝はその会話を聞いて思う。

さて、とベスウエルは続ける。

「どうするんだ。協力するか？」

「俺たちだって協力者は欲しい。だが……」

黒短髪の男は自動小銃の銃口をベスウエルに向け、後ずさりながら言う。

「信用出来ない、か」

ベスウエルは呟く。

「ああ、そうだ。いきなり攻撃してくるような奴を信用出来る訳がない。そもそも、貴方たちの新人類に復讐する、というのが本当だ」という証拠さえない」

黒短髪の男が自動小銃の引き金に指を掛ける。しかし撃つてはこないだろう。無意味だと悟っているだろうから。

「証拠、か」

ベスウェルは顎に手をやり思案する。銃口が向いているのにこの余裕だ。

「確実なものではないが一応あるぜ。竹芝」

ベスウェルが竹芝を手招きする。首を傾げつつ、竹芝はベスウェルに近づいた。

「彼はML事件の主犯だ」

さらりとベスウェルは言う。竹芝も特に隠す気は無かったので頷いた。相手が旧人類だと悟っていたからだ。

「……ML事件の主犯？ 君が？」

黒短髪の男だけでなく、その男の仲間と思われる十数人の男女も驚きの声を漏らしている。

「それは……本当か？」

黒短髪の男性が竹芝に問う。

「ええ、本当です。僕はハーフですから。魔法を使いました」

竹芝は答える。

「ハーフ。確かにそれなら……」

黒短髪の男性は額に手をやり、思案顔でそんな事を呟く。

「ねえ、隊長」

黒短髪の男の後ろに立っている金長髪の女性が男を呼ぶ。

「少し失礼しても良いか」

ベスウェルに確認をとってから黒短髪の男性はその金長髪の女性の元に向かう。

「……大丈夫なのか？」

田中は小声でベスウェルに問う。何やら真剣に話し合いを始めたからだ。

「旧人類にとってML事件の主犯は英雄の筈だ。俺なんかよりな。問題ないだろう」

ベスウェルは黒短髪の男性たちの話し合いを見ながらそう言った。

「さて、どうする」

間木はあの男たちと協力するかどうかを仲間たちに問う。

「確かに協力者は必要だ。受け入れるしかないんじゃないのか？」

ゲーンはこんな状況にも関わらず煙草を口にくわえている。火はついていないが。

「相手には隊長が求めていたM L事件の主犯が居るし、拒む理由はないんじゃない？」

マリーがゲーンの横で言う。確かにその通りだと間木は思う。自分だってM L事件の主犯と合流したいとは思っていた。あの男の事はそんなに信用出来ないが、目的は同じだと言っている。なら、拒む理由はない。

「そうだな。では、協力するという結論で構わないか？」

間木は仲間全員に確認をとる。皆、ゆっくりと頷いた。

「分かった。そうしよう」

間木は踵を返し、男の元に寄る。そして、右手を差し出した。

「俺たちも貴方たちに協力しよう。ただ、もしも何か怪しい素振りを見せたりした場合は無許可で抜けさせてもらう。それでも構わないか」

「ああ、構わない。俺たちは目的が同じなんだ。そうはならない」

男は間木の手を握り返した。

「さて、もう目的も果たした。行こうか」

男は踵を返し、男の仲間と思われる人たちの肩を叩きながら歩いていく。

「どこに行くんだ？」

間木は首を傾げる。

「拠点にだよ。君たちも車に乗って着いてきてくれ」
言いながら男は尚も歩いていった。

「なあ、ベスウェル」

変電所の付近に駐車した車に乗り込む直前に喜多倉はベスウェル

に言う。

「ん、何だどうした？」

「さっき言っていただろ？ 目的は新人類に復讐する事だつて。それは本当か？」

喜多倉は問う。喜多倉たちはベスウエル目的について何も知らされてない。竹芝も同様だ。

「ああ、そうだ。復讐という用語弊があるが、やることはそう変わらない」

「なら旧人類狩りの犯人はベスウエル、あんたじゃないのか？」

喜多倉は旧人類狩りの犯人がベスウエルだと思っている。そういう噂が流れていたからだ。

「何言ってるんだ。俺はそんな事しないぜ。むしろ魔法なんて無い方が良いと思っている」

まあ、そういう噂が流れているのは知っているがな——とベスウエルは笑う。

そうか、と喜多倉は呟きながら車に乗り込む。

「それを聞いて安心したよ、ベスウエル」

喜多倉は息を大きく吐きながら言った。

小屋

「さて、着いたぞ。ここが俺の拠点だ」

ベスウェルが小屋の前で車を止める。二台のワンボックスカーから降りてきた協力者たちはその拠点を見るなり皆一様に首を傾げた。「拠点、これが？俺たちはネズミ何かじゃないんだぞ」

白髪まじりの男性は不満そうに言う。

「仕方がないだろう。そんな大きな建物を建てる土地も時間も能力もないんだ」

ベスウェルは小屋に入り、中を見渡す。何か思案をしている。

「さすがにこの小屋で話すには面積が足りないか……仕方ない、自己紹介はこの場でやろう」

ベスウェルは小屋の出入り口の前で地面に腰を下ろす。

「自己紹介か。そう言えばまだだったな」

喜多倉も地面に腰を下ろす。

「そうだ。俺たちはこれから一緒にやっていく仲間だからな。君たちも座ってくれ」

ベスウェルにそう言われ、協力者たちは腰を下ろす。それを見てから竹芝たちも腰を下ろした。

「さて……では先ず、こちらから自己紹介をさせて貰おう。俺は『間木真一』。一応この反抗武装組織の隊長をしている。と言っても小規模だからそれ程の者ではないけれど——これからよろしく」

そう言っ間木は頭を下げた。それを見てから竹芝たちも頭を下げる。

「あつ、では次は私で」

間木の視線に気付いた金長髪の女性は口を開いた。

「私は『マリー・リーヒット』。この反抗武装組織の副隊長を務めています。よろしく」

マリーは金色の髪をなびかせながら頭を下げる。

「マリー……？　という事は外人なのか？」

田中は驚いたように首を傾げる。見た目で気付かないものだろうかと竹芝はそれを聞いて思う。

「ええ。昔からこの国で過ごしてますから語学は達者ですけど」

マリーは微笑みながら言う。見れば、その間木たちの言う反抗武装組織の中には他にも外国人や女性が居る。こちらとは大違いだなと竹芝は見ながら思った。

「次は……俺かな。俺は『ゲーン・マーカラ』。マリーと同じく外人だ。まあ、俺は隊長や副隊長みたいな役職は無いんだけど。よろしく頼む」

ゲーンが頭を下げる。竹芝たちも同時に頭を下げた。

「さて、じゃあ次は――」

間木が仕切り、残るメンバーが紹介を始める。そして総勢十六名を紹介した後、間木はため息を吐いてからベスウエルに言う。

「さて、こちらの自己紹介は終わった。次はそちらだ」

「そうだな。では先ず、俺から。俺は『ベスウエル』だ。これからよろしく頼む」

ベスウエルは間木に握手を求める。同じ隊長格同士の挨拶だろう。

「ああ、こちらこそよろしく頼む」

間木はベスウエルの手を握った。

「それにしてもベスウエル、ね。世界を救った英雄という認識で正しいの？」

マリーはその二人の握手を見ながらベスウエルに問う。

「ああ、それで構わない。事実だからな」

ベスウエルは続ける。

「お次は竹芝、頼む」

ベスウエルが隣に座る竹芝に言う。竹芝は深呼吸をしてから自己紹介を始めた。

「僕は『竹芝裕也』です。ご存知だとは思いますが、ML事件の犯人でハーフです。よろしく願います」

竹芝が頭を下げると、間木は竹芝に向かって手を差し出した。

「君があゝのML事件のか。君は我々旧人類にとって希望の光だ。君が居なかったら我々もまだひっそりと隠れながら活動をしていた事だろう」

「え、ええ。こちらこそありがとうございます」

竹芝は間木のその手を握った。その間木の言葉を聞いて竹芝は救われた様な気分になる。自分が確実に誰かを殺しているのは確かだったからだ。あの時、白坂にも……。

その人物の名前を思い出して思わず目を細めてしまった。あの時、共に飛行機で墜落した白坂。その姿は墜落現場では確認できなかった。あの時は色々あってベスウェルにその事を聞く暇も余裕もなかった。今度、ベスウェルに聞いてみよう。あの場に居ないという事は生きているという事には違いない筈だ。勿論、機内で倒れていたという可能性も否めなかったが。

「次は俺か。俺は——」

喜多倉を含む残り三人の自己紹介を終えてからベスウェルは口を開いた。

「さて、これから俺たちは共に行動していく訳だが——正直先ずは目的より新たな拠点を探したい。この拠点、というより小屋じゃこの人数が過ごすことは無理だからな」

ベスウェルが顎に手をやる。どうやらこの拠点がお粗末なものだという自覚はあるようだ。

「確かになー。三人でさえ結構窮屈だったんだから」

田中が空を見上げながら言う。今朝の事を思い出しているのだろう。

「ベスウェル。何か土地的な条件はあるのか？　こんな山奥だから秘匿性を求めているのは分かるが」

間木がベスウェルに言う。

「条件か？　君の言う通り、秘匿性を求めている。後は……そうだな、武器を置ける空間が欲しい。小屋の場合は地下室にしまってい

るが、それだと出し入れが面倒だからな」

「えっ、そうなのか？」

ベスウエルのその発言に竹芝は首を傾げた。あの小屋に地下室があったとは知らなかった。

「ああ、そういうば説明してなかったな。絨毯を剥がすと床に扉があるんだよ」

言ってからベスウエルはうーん、唸った。

「昔ならいざ知らず、ML事件の起きた今、そう簡単にそんな家に住めないだろうな。今から作るという選択肢も——いや、それをしてら計画が……いや、しかし……」

「いや、待ってくれ」

あーだこーだと一人で自問自答を繰り返しているベスウエルに間木が言う。

「それなら、良いところがあるぞ。ついて来てくれ」

そう言って間木は二号車に乗り込んだ。

新しい拠点

「どうだい？　ここならご希望に答えられると思うんだが」

目の前にある小さな病院を指差して間木が言う。竹芝たちは車を走らせ、間木たちの活動拠点であるこの場に来ていた。

「なるほど。ここがお前たちの拠点か。なるほど、確かに広いし武器を置く空間もあるが……しかし、ここだと周囲にバレないか？」

ベスウェルは降車し、車のドアを閉めてから言う。

「いいや、それは大丈夫だろう。この組織を設立してから約九年経つが、一度もそんな危機に陥ったことはない。町外れにあるし、この病院を知ってる者もそう居ないだろう」

間木はそう言いながら病院の中に入っていた。

「九年、ね……」

ベスウェルは病院の外装を見ながらそう呟く。かなり年季が経っているのか、外装は黒ずんでいた。

十年前に起きた旧人類狩り。そしてその一年後から、間木たちはこのような組織を立ち上げ、ずっと反抗の時を待っていた。旧人類狩りの時からずっと『魔法を無力化にする魔法』を学んでいた竹芝以上に気の遠くなるような事だろう。

車を降りながら竹芝はそう思う。

「さて、みんな中に入ってきてくれ」

病院の中から間木の声が聞こえる。頷いてから、ベスウェルたちは病院の中に入っていた。

「うおっ、なかなか広いな」

病院に入るなりそう驚きの声を漏らしたのは喜多倉だった。

「確かに広いな。待合室だけでもあの小屋以上のスペースはあるんじゃないか？」

田中は待合室を見ながら呟く。待合室は広く、ソファや椅子を複数置いていてもなお余りある程だ。待合室には受付があり、その

近くにはお手洗い所がある。

「まあ、ここは小さいと言っても病院だからね。それなりの広さはあるよ」

マリーはそう言つて受付の横にある診察室に入っていく。

「なるほど、ここが武器庫つて事か」

マリーに続いて診察室に入つていったベスウェルが言う。診察室のベッドや床の上には様々な武器類が置かれてある。

「そう。診察室は病院として機能していないから使わないし、結構広いからね」

ふむ、と顎に手をやりながらベスウェルはその武器を眺める。自動小銃に機関銃。SFにでも出てきそうな近未来型の大型銃。円盤型の設置物。様々だ。

「これは何なんだ？」

診察室に入つた喜多倉が円盤型の設置物を手に取りながら間木たちに聞く。

「ああ、それは小型の魔法磁場発生装置だ。数は少ないし発生距離も短いが、何れ使つたろうと思つて保管してある」

間木はその円盤型の設置物——魔法磁場発生装置を見ながらそう答える。

「魔法磁場発生装置か。随分珍しい物を持っているんだな」
ベスウェルが診察室から出ながら言う。

「ああ。長い時間掛けて集めたからな。大抵の武器は揃っている筈だ。新人類が最近作つた武器なんかは例外だが」

間木は処置室に向かつていく。

「さて、この処置室が寝床だ。残念ながら人数分のベッドはないが、そこは後々考えていこう」

間木がベッドに腰を下ろしながら言う。処置室にはベッドが十八個程置かれていた。二十一人居る今、ベッドの数は足りない。残り三人はソファ―か何かで寝るしかないのだ。

「ん、あの奥にある扉は？」

田中が処置室の奥にある扉を指で示す。

「ああ、あそこは簡易シャワー室よ」

マリーは壁に寄りかかりながらそう答える。

「簡易シャワー室？　そういえば暫くシャワーとか浴びてない気がするなあ」

竹芝は自分の服の臭いを嗅ぎながら呟く。ここ二、三日で色々な事があつた。ML事件にベスウエルとの出会いに協力者探し。そして変電所を襲い、今に至る。随分無茶な事をしてたな、と竹芝は今更思った。

「それで、どうなんだベスウエル。ここなら条件にも合うだろう？」

間木がベスウエルの顔を見て問う。

「正直広さも十分だし、首を横に振る必要もない。拠点はここで決定で良いだろう」

そう言いながらベスウエルは踵を返して病院を出て行こうとする。

「どうしたんだ？　ベスウエル」

そんなベスウエルの行動を不審に思った間木がその背中に問い掛ける。

「あの小屋の地下室にある武器を回収しに行ってくる。竹芝たちも着いてきてくれ」

「え、ああ。分かった」

そう返事をしながら竹芝たちはベスウエルに着いていった。

武器の回収作業にはかなり時間が掛かり、再び病院に戻ってきた時には既に日は沈んでいて、本格的な夜が訪れようとしていた。

「ふうっ」

久しぶりにシャワーを浴びた竹芝は病院の外に来ていた。冬の風は冷たいが、何故かその冷たさが心地よかった。

「——ん？」

暫く空に浮かぶ星を見上げていた竹芝だったが、近くに誰かが居る様な気配を感じ、視線をそちらの方に向けた。駐車場の所にマリ

一の姿があつた。手に持った煙草をしみじみと見つめている。

「マリーさん？」

マリーの方に歩みながら竹芝は問い掛ける。

「えっ？」

驚いたようにマリーは竹芝の方に視線を向けた。

「ビックリした……えーっと、竹芝くん、だっけ？」

煙草を手の平で握りながらマリーは言う。

「あ、別に呼び捨てでも構わないですよ」

手を左右に振ってから竹芝は続ける。

「ライターか何かは病院にあると思いますけど、持ってきますか？」

病院を親指で示しながら竹芝はマリー二提案する。

「え——あつ、これの事？ 大丈夫よ。私は煙草、吸わないし」

手の平を広げ、煙草を竹芝に見せながらマリーは微笑んだ。

「そうなんですか？」

竹芝は首を傾げた。ならどうして煙草を持っているのだろうという当然の疑問が浮かび上がってきたからだ。

「それより、そろそろ中に入らない？ もう大分冷えてきたし」

そう言いながらマリーは病院の入り口に向かう。

確かに大分冷えてきたし、下手したら湯冷めしてしまう。

「そうですね」

答えて、竹芝も病院の中に入っていった。

魔法が使えるようになる薬

それぞれが自由な時間を過ごし、夜も深まってきた午後十一時。

ベスウエルは皆を病院の待合室に集めた。

「もう拠点もここで決定した。これから目的の事について話したい」

ベスウエルはソファアに座り、全員を見回しながら続ける。

「これから俺たちは暫く変電所襲撃に力を注ぎたい」

ベスウエルは言う。そうしないと計画実現は不可能だと。

「それは別に構わないが……その計画つてのは新人類復讐つて事の筈だ。それなら変電所じゃなくて発電所の方が良いんじゃないのか？」

拳手をし、間木が異論を唱える。制圧するなら発電所の方が長期間混乱にもちこめるだろうという事を言いたいのだろう。

「いや、変電所で良いんだ。そして計画については今は詳しく説明出来ない。何か不満が？」

ベスウエルは間木を見つめて問う。

「いや、特に不満は無い。しかし、その計画の事は何れは説明してくれるのか？」

「ああ、それは何れ時期が来たら説明する。他の者も異論はないな？」

ベスウエルが仲間全員に問い掛ける。全員が頷いた。

「よし、では明日から行動を開始しよう。今日はゆっくり休んでくれ」

そう言つてベスウエルはソファアの上で横になった。

それからベスウエルたちは役割を分け、一週間の内に変電所を襲い続けた。時間が経てば警備が厳しくなるだろう事が予想されたため、のんびりやっている暇などなかった。

そして変電所制圧の件も一段落ついた十二月二十四日。待合室で

朝食をとっていた時に喜多倉がある事を呟いた。

「そう言えば最近、妙な噂があるみたいだな」

「妙な噂？　どんなのだ？」

コンビニで先ほど喜多倉が買ってきたばかりの弁当を頬張りながら間木は首を傾げる。M.L事件のおかげで旧人類でも外に出やすくなっていた。

「何でも、魔法が使えるようになる薬を製造している組織が居るか。さっき買い物に行った時に聞いたんだ」

喜多倉はガラスカップに入っているお茶を喉に流しながら言う。

「魔法が使えるようになる薬？　それって……」

マリーが手に持っているがガラスコップを空中で静止させながら言う。

「違法な薬物類だろうな、どうせ」

食事を終えたゲーンがライターをいじりながらそう呟く。

「だろうな……。そんな物は今まで存在していなかった筈だ。大方、麻薬組織か何かの新手詐欺だろう。それにしても稼ぎ上手だな、全
く」

間木は箸を机の上に置いた。こんな時期だ、欲しがる者は沢山居るだろう。旧人類だって新人類だって。

「中々面白い話をしているな。魔法が使えるようになる薬、か」

シャワーを終え、処置室——この病院では寝室——から出てきたベスウェルが頭にタオルを巻きながら言う。黒の短髪からは水が滴り落ちていた。

「ああ、ベスウェルか。まあ、どうせ嘘だろうけどな」

喜多倉はベスウェルに身体を向けながら言う。

「その組織ってはこの地域に居るのか？」

ベスウェルは喜多倉に問う。

「え？　ああ、確かそうだったと思う。この周辺にあるみたいな話を聞いたし。まあ詳しい場所は知らないけど」

喜多倉は一瞬戸惑いながらもそう答えた。

「そうか。ならその組織を潰す事が出来るな」

「——んん？」

ベスウエルはその言葉に田中は首を傾げた。

「どういう事だ？ まさかその組織を潰すなんて言い出すんじゃないだろうな？」

喜多倉はベスウエルに問い掛ける。

「そのまさかだ、と言わせて貰おう。正直、真偽が分からないからな。もし本当だったら計画の妨げになる。なら今の内に潰すべきだ。そう思わないか？」

「計画自体よく知らないから何とも言えないけどな」

ベスウエルの語りかけに喜多倉は首を左右に振った。

「なるんだよ。計画の妨げにな。それで、組織を潰すという意見に反対の者は居るか？」

ベスウエルが仲間を見回しながら言う。どんどん話が進んでいく。だが、その意見に反対する者は居なかった。

「その計画つてのには新人類に復讐つても含まれているんだろう？ なら反対する理由がない」

間木はそうベスウエルに言った。

「そうか、それは助かる。では俺はその組織の居場所を突き止めてくる」

頭に巻いていたタオルをソファアの上に放り投げ、ベスウエルは病院を出ていった。

何も情報も無いのにどうするのだろう、と竹芝たちは首を傾げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2831v/>

魔法の存在しない世界【改訂版】

2011年9月25日03時27分発行